

金剛峯寺遺跡

—高野山大学校舎建設工事に伴う発掘調査報告書—

2015

高野町教育委員会

序 文

蓮八葉のこの高野山上に、庶民教育の祖とも仰がれる弘法大師の修善研学のみ跡を踏んで1200年。その間、時流の消長盛衰に多彩な変遷を辿ってきたであります。その時代時代の苦楽をそれなりに、最善最高に生かし、また生きてこられたであろう先人の、それぞれの生き様が、蘇りました。

昭和58年、高野山大学新校舎建築計画が持ち上がった時、開創1150年開白の前年でもありました。それから30年を経ての調査報告書刊行はあまりに遅きに失したと言うまでもありません。が、当地区的歴史を知る上でその一助となることを、心より願う次第であります。

最後になりましたが、調査に当たり数々のご協力をいただいた関係各位並びに調査事業の推進にご援助を賜った地元関係者の皆様に深く感謝の意を表し、厚くお礼申し上げます。

平成27年4月1日

高野町教育委員会

教育長 角濱正和

例　言

1. 本書は、和歌山県高野町高野山に所在する金剛峯寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、高野山大学新校舎建設工事に伴い、昭和59（1984）年から翌昭和60（1985）年にかけて実施され、その後本格的な整理作業が実施されず、現在まで未報告であったが、平成23年から平成26年の4ヵ年で再整理及び報告書作成を実施した。
3. 調査主体は社団法人和歌山県文化財研究会である（名称当時）。
4. 調査面積は約1,600m²を測る。
5. 出土遺物の再整理は、和歌山県緊急雇用創出事業臨時特例基金活用事業の交付を受け、平成23年から平成24年の1ヶ年で株式会社イビソクとの委託業務により実施した。
6. 出土遺物の再整理、本書の執筆・編集は高野町教育委員会の池田一城、株式会社イビソク持田透が行った。
7. 本書で掲載している遺物写真は、横山亮（株式会社イビソク）が撮影した。
8. 本書で参考にした編年は『九州陶磁の編年』によるものである。
9. 本書で用いる方位は、真北である。
10. 遺物実測の図面の縮尺は1／4を基調とし、石造物などは1／6とした。
11. 整理作業に関わった人員は以下のとおりである。
池田一城（高野町教育委員会）、持田透、行廣真紀子、堀井誠一、齊藤和行、宇野勝、中神武三（株式会社イビソク）
12. 出土遺物整理及び当時の調査情報の収集に際しては、下記の機関・個人からご協力・ご教示を得た。記して謝意を表します。
黒石哲男、田中元浩（和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課）、佐藤亜聖、武田浩子（公益財團法人元興寺文化財研究所）（五十音順・敬称略）
13. 調査及び整理作業で作成した実測図・写真・台帳の記録資料及び出土遺物は高野町教育委員会が保管している。

目 次

第1章 経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘作業及び整理作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
(1) 高野山の歴史的環境の概要	3
(2) 調査地の歴史的概要	4
第3章 調査の成果	9
(1) 造構	9
a. 井戸	9
b. 特殊造構	12
c. 溝	15
d. 土坑	18
(2) 遺物	19
第4章 まとめ	33
抄録	

圖版目次

第1図 調査地位置図	第10図 遺構図5
第2図 『高野山壇上井寺中絵図』	第11図 遺構図6
金剛峯寺藏	第12図 出土遺物実測図1
第3図 『高野山壇上及び寺家絵図』	第13図 出土遺物実測図2
金剛峯寺藏	第14図 出土遺物実測図3
第4図 『高野山全山及び周辺の絵図』	第15図 出土遺物実測図4
赤松院蔵	第16図 出土遺物実測図5
第5図 調査区全体図	第17図 出土遺物実測図6
第6図 遺構図1	第18図 出土遺物実測図7
第7図 遺構図2	第19図 出土遺物実測図8
第8図 遺構図3	第20図 宝性院跡折敷埋納遺構
第9図 遺構図4	

写真図版目次

- | | | | |
|------|--------------------------------------|------|--|
| 図版 1 | 1. 調査区全景（東から）
2. 調査区全景（南から） | 図版11 | 1. SD006・SD009・SX010
(南から)
2. SD006・SD009・SX010
(西から) |
| 図版 2 | 1. A区全景（西から）
2. B区全景（西から） | 図版12 | 1. SD002（西から）
2. SD002下部遺構（東から） |
| 図版 3 | 1. C区全景（南西から）
2. D区全景（西から） | 図版13 | 1. SK011（北から）
2. SK219（北から） |
| 図版 4 | 1. E区全景（南から）
2. F区全景（北から） | 図版14 | 出土遺物 1 |
| 図版 5 | 1. G・H区全景（南から）
2. SE001（北から） | 図版15 | 出土遺物 2 |
| 図版 6 | 1. SE002（北から）
2. SE003（北から） | 図版16 | 出土遺物 3 |
| 図版 7 | 1. SE004（南から）
2. SE005・SE006（南から） | 図版17 | 出土遺物 4 |
| 図版 8 | 1. SE007（西から）
2. SX001・SX004（西から） | 図版18 | 出土遺物 5 |
| 図版 9 | 1. SX003（北から）
2. SX005（北から） | 図版19 | 出土遺物 6 |
| 図版10 | 1. SX006・埋桶004（北から）
2. SX010（北から） | 図版20 | 出土遺物 7 |
| | | 図版21 | 出土遺物 8 |
| | | 図版22 | 出土遺物 9 |
| | | 図版23 | 出土遺物 10 |
| | | 図版24 | 出土遺物 11 |
| | | 図版25 | 出土遺物 12 |
| | | 図版26 | 出土遺物 13 |
| | | 図版27 | 出土遺物 14 |

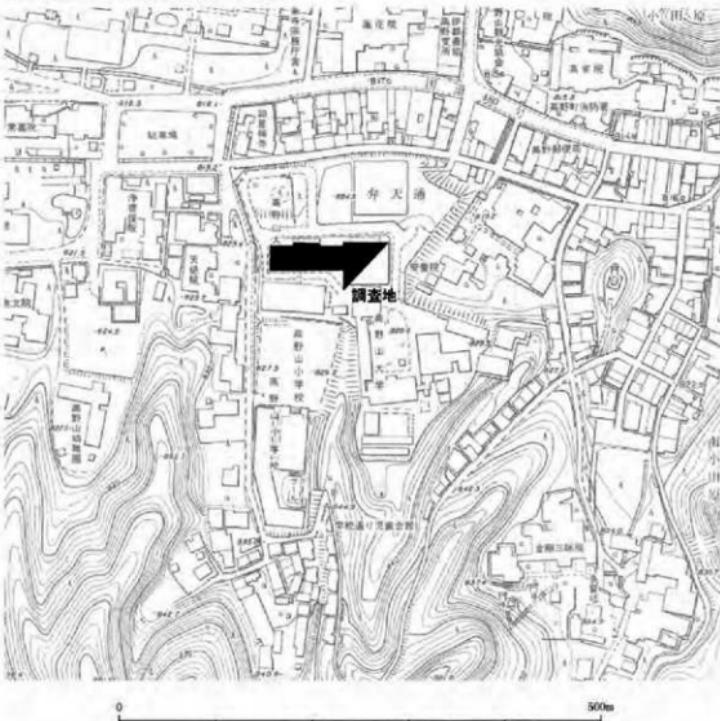
第1章 経緯

第1節 調査に至る経緯

昭和58（1983）年、和歌山県伊都郡高野町高野山において、高野山大学の校舎建設工事が計画された。建設予定地は金剛峯寺遺跡の範囲内にあり、建設に伴って建設予定地の発掘調査が必要となり、昭和59（1984）年から昭和60（1985）年にかけて約1600m²の発掘調査が行なわれた。

調査主体は社団法人和歌山県文化財研究会（現在の公益財団法人和歌山県文化財センター）であった。

金剛峯寺遺跡は、弘法大師空海が弘仁7（816）年に創建した真言密教の根本道場「高野山」の中心伽藍を含む遺跡である。今回の調査地は、院の跡地としては明確にできていないが、東隣には安養院、西に天徳院と隣接する。



第1図 調査地位置図

第2節 発掘作業及び整理作業の経過

当時の高野町教育委員会には、文化財専門職員が配備されていなかったことから、発掘調査は社団法人和歌山県文化財研究会（現在の公益財団法人和歌山県文化財センター）に依頼し、調査が実施された。野帳など当時の資料がないため正確な期間を知ることはできないが、調査期間は昭和59（1984）年から翌昭和60（1985）年の1年間のうち、概ね数ヶ月にわたったと考えられる。

その後、本格的な整理作業を経ないまま、平成18年度内において、遺物コンテナ（260箱）、調査図面、写真などが高野町教育委員会に引き渡された。確認したところ、遺物については洗浄のみが実施されていたようであったが、長い時間が経過していたため、遺物表面に埃などの堆積、汚れが確認された。

高野町教育委員会では、これら金剛峯寺遺跡出土の未整理遺物について、和歌山県緊急雇用創出事業臨時特例基金活用事業の交付を受け、民間調査会社に委託して平成23年度から4ヵ年計画で再整理及び報告書の編集を実施した。

整理作業は、遺物コンテナ260箱分の出土遺物を対象に、必要な遺物については再洗浄を実施し、注記、台帳作成を行い、約500点の遺物を抽出した。抽出遺物約500点を精査し、この内200点については報告書掲載遺物として実測作業、浄書、遺物観察表の作成を実施した。その後は最終段階として遺物写真撮影を行った。報告書作成については高野町教育委員会の指示のもと、図面20枚、及び写真的整理作業、文章執筆、編集を行い、平成27年度内において本書を刊行するに至った。なお、発掘調査時から年月が経ったことによって、残されていた記録類が限定されていたため、遺構番号などについては不明な部分があったが、特徴的な遺物は報告対象とした。



写真1 出土遺物コンテナ



写真2 整理作業風景

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

高野町は、和歌山県伊都郡に位置する。そのうち金剛峯寺遺跡が展開する高野山は町の中心地として、紀伊山地を構成する山脈のひとつである長峰山脈北東部にある標高1,000m前後の峰々に囲まれた盆地状の平坦地である。町の中心地である高野山の周囲には8つの峰が聳え、それらは全体として仏教思想における蓮華の花弁に例えられ、「高野八葉」または「外八葉」と呼ばれている。そのうち代表的な峯は西側に弁天岳、東側に摩尼山、楊柳山、転輪山であるが、それら峰々をたどる古道は、高野山結界の道（高野山女人道）として高野町指定文化財に指定されている。



金剛峯寺遺跡が展開する高野山は、東西約6km、南北約3kmと東西に長い。標高は約800mと高く、また盆地地形でありながら、谷状地形が複雑に入り組み、有田川の源流域となっている。寒冷地であるため生産物は乏しいが、高野山を中心として考えた場合、その周辺に位置する比較的な温暖な集落とのつながりによって、食物や紙、位牌などが生産され、高野山に運搬されていた。

第2節 歴史的環境

(1) 高野山の歴史的環境の概要

高野山は弘法大師空海(774-835)が唐から帰国後、嵯峨天皇から現在の高野の地を下賜され、真言密教の修禪道場、根本道場として弘仁7(816)年に開創されたことに始まる。

空海がまず着手したのは密教伽藍の造営であり、先方として弟子の実惠、円明が着手し、その後、空海自らが指揮を執ったといわれている。しかし空海在世中に伽藍が完成することはなかった。

高野山は山全体として聖域といえるが、壇上伽藍及び奥院は、とりわけ聖域としての性格が強い。空海が奥院に入定した後、末法思想の流行とともに、高野山を極楽浄土とする思想が貴賤・貴族を中心に巻き起こった。それによって奥院御廟の近くには經塚などが造営されることになり、また白河上皇や藤原道長の高野參詣登山などが契機となって、高野淨土思想は一気に全国化したといえる。また15世紀頃から活躍する高野聖による勧進・唱導活動は、高野山信仰を貴族のみならず一般庶民にまで広める結果となり、近世期には寺院数も増加し、多くの参詣者が高野山を訪れるようになった。

(2) 調査地の歴史的概要

調査地は、金剛峯寺遺跡だけを俯瞰的に見た場合は南側に位置しているが、總本山金剛峯寺と比較的近い場所に所在しているため、高野山としては比較的中心部に位置している。現在は高野山大学構内となっているが、当然のことながら、調査地は多少の歴史的変遷を経過している。まず古絵図を資料として調査地を眺めてみると（第2図、第3図、第4図）、北に青巖寺と興山寺（金剛峯寺の前身）が見え、西に天徳院が所在しているのがわかる。3寺院ともに現在も同位置に所在しているため、近世期における今回の調査地については概ねの位置が判別できる。



第2図 『高野山壇上井寺中絵図』(元禄6(1693)年)、金剛峯寺蔵

近世期における調査地には、金藏院という比較的大きい寺院が西側に所在し、その東側一帯には数ヶ寺の寺院が建立されていたようである。また南側から迫る丘陵については現在の地形とはほぼ変わらないと考えられる。

また、高野山上を構成する谷々としては、調査地は天保10（1839）年の『紀伊綱風土記』及び文化8（1811）年の『紀伊国名所図会』の記述に基づけば小田原谷に属すると考えられるが、調査地西側の南北に通る道を隔てた場所に所在する天徳院は、南谷のうち西光院谷に属している。ちなみに調査地一帯にみられる寺院群は、高野三派のうち行方方に属することが『高野山壇上及び寺家絵図』(Fig.2) の色分け（白：学侶方、緑：行方方）からわかる。



第3図 『高野山壇上及び寺家絵図』(宝永3(1706)年)、金剛峯寺蔵

以上のように近世期の調査地には、数ヶ寺の子院が存在していたのは確かなようであるが、近代期において調査地は大きな変化を受ける。

近代初頭の調査地は「上の段」と呼ばれ、飲食店などの商家が軒を連ねていた。この「上の段」自体の意味合いについては不明なところが多く、実際は近世後期に編纂された『紀伊国名所図会』の挿絵にも「上ノ段」と明記されていることが認められるが、そこでは子院以外の建造物などは描かれていないため、前述したように近世期には子院群のみが存在していたと考えられる。ではいつ頃から商家群に変貌したのかという疑問が残るが、おそらくは幕末頃から次第に商家に移り変わり、明治5(1872)年の太政官令による女人禁制などを契機として商家の建設が相次いだのではないかと考えられる。たとえば明治14(1881)年には、調査地である上の段に個人経営の女人参籠所が建設されており、宿泊料を徴収している。また、大正年間における調査地における商家の数は、少なくとも20軒を超える程度が存在しており、相応の活況を呈していたと考えられる。



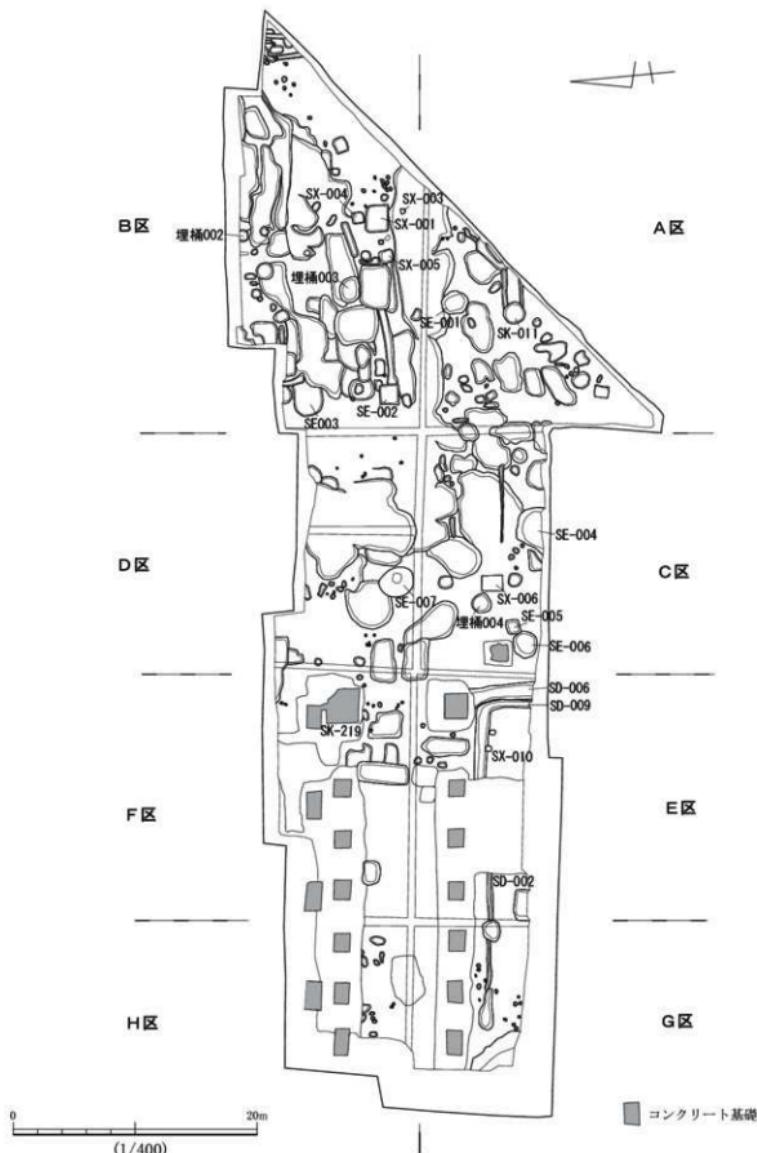
第4図 『高野山金山及び周辺の絵図』(文化8(1811)年)、赤松院蔵

このように調査地は、近世期までの子院群、近代初頭にける商家群と変遷してきたわけだが、同地には昭和期において、それまで金剛峯寺西側(現在の金剛峯寺新別殿付近)に所在していた高野山大学の建設及び移転が決定する。概略だけを示すと、まず昭和4(1929)年に図書館及び校舎が建設され、講堂については昭和7(1932)年に移転が完了、学生ホールについては昭和8(1933)年に建設されている。大学施設の建設及び移転に伴い、それまで上の段として存在していた商家群は高野山の北東に位置する鷲谷に移転が決定された。

以上みてきたように調査地は、近世の子院群から近代初頭の商家群、高野山大学という大きな歴史的変遷を経験してきた場所である。

【参考文献】

- 仁井田好古 1970 『紀伊続風土記(五)』,歴史図書社
高市志友、加納諸平 1970 『紀伊国名所図会(二)』,歴史図書社
高野山大学百年史編纂室 1986 『高野山大学百年史』,高野山大学
山口耕栄 1976 『高野山年表昭和編』,高野山大学出版部
日野西眞定 1988 『高野山古絵図集成』,タカラ写真製版株式会社



第5図 調査区全体図（縮尺 1 / 400）

第3章 調査の成果

(1) 遺構

今回の調査では近世～近代の遺構を確認することができた。検出した遺構は、井戸、土坑、溝、埋納遺構、埋め桶、ピットである。以下に主要な遺構について述べる。

a. 井戸（開通遺構含む）

SE001（第7図・図版5）

A区で検出した井戸である。井戸の掘り方の規模は $1.62\text{m} \times 2.03\text{m}$ の平面梢円形で、検出面から深さ 0.90m まで掘り下げている。深さ 0.90m の位置で石組みの井戸を検出し、中心の井戸の直径が 1.00m を測る。こぶし大から人頭大の縞配片岩の角礫で組み上げられた井戸は深さ 1.75m を測り、底に石が敷かれている。井戸もしくは水溜めかもしれない。

埋土からは遺物がわずかに出土したが、図示できる遺物はなかった。埋没した時期は江戸時代後期であろう。

SE002（第7図・図版6）

B区で検出した水溜めである。掘り方の規模は 1.61m 四方の平面正方形で、検出面から深さ 1.00m まで掘り下げている。四隅に丸太を立て、中にホゾを設けて横木を組み合わせた枠を検出した。枠の辺には幅 $0.05\text{m} \sim 0.06\text{m}$ の立木を並べている。枠の底は、さらに深さ 0.15m の土坑が掘りくぼめられている。

埋土からは土師器皿や陶器、煙管、多量の錢貨が出土した。遺物の特徴から19世紀前半に埋没したと考えられる。

SE003（第6図・図版6）

B区で検出した井戸である。井戸の掘り方の規模は $2.60\text{m} \times 2.7\text{m}$ 以上の平面梢円形で、中心の井戸の直径が 0.90m の石組み井戸である。こぶし大から人頭大の角礫で組み上げられた井戸は深さ 3.5m 以上を測る。

埋土からは磁器や五輪塔の残欠が出土した。遺物の特徴から19世紀前半に埋没したと考えられる。

SE004（第7図・図版7）

C区で検出した井戸である。掘り方の規模は不明で、石組みの井戸枠は直径約 0.6m を測る。深さは検出面から 0.8m 以上を測る。

埋土からは遺物の出土はなかった。埋没した時期は不明である。

SE005（第8図・図版7）

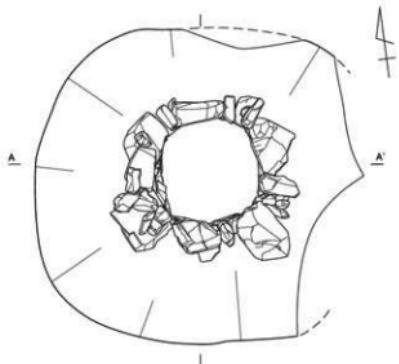
E区で検出した水溜めである。掘り方の規模は 1.31m 四方の平面梢丸方形で、検出面から深さ約 1.2m まで掘り下げている。四隅に丸太を立てかけている。掘り下げた位置からさらに深さ約 0.4m の土坑が掘りくぼめられている。

埋土から遺物は出土しなかった。埋没した時期は不明である。

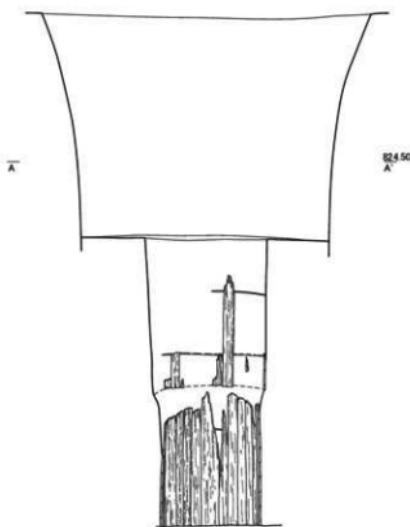
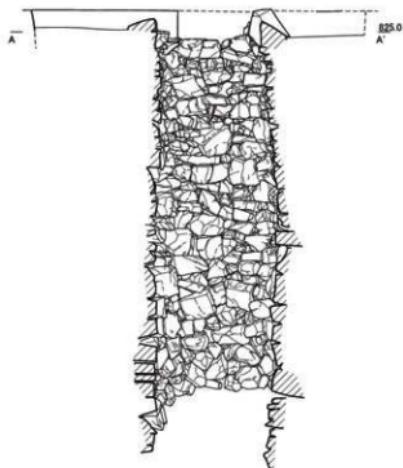
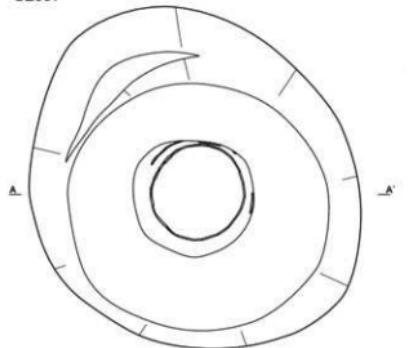
SE007（第6図・図版8）

D区で検出した井戸である。井戸の掘り方の規模は $2.60\text{m} \times 2.98\text{m}$ の平面梢円形で、深さ 1.80m まで掘り下げている。検出面から 0.7m 下がった位置にステップ状の平場を削り出しており、

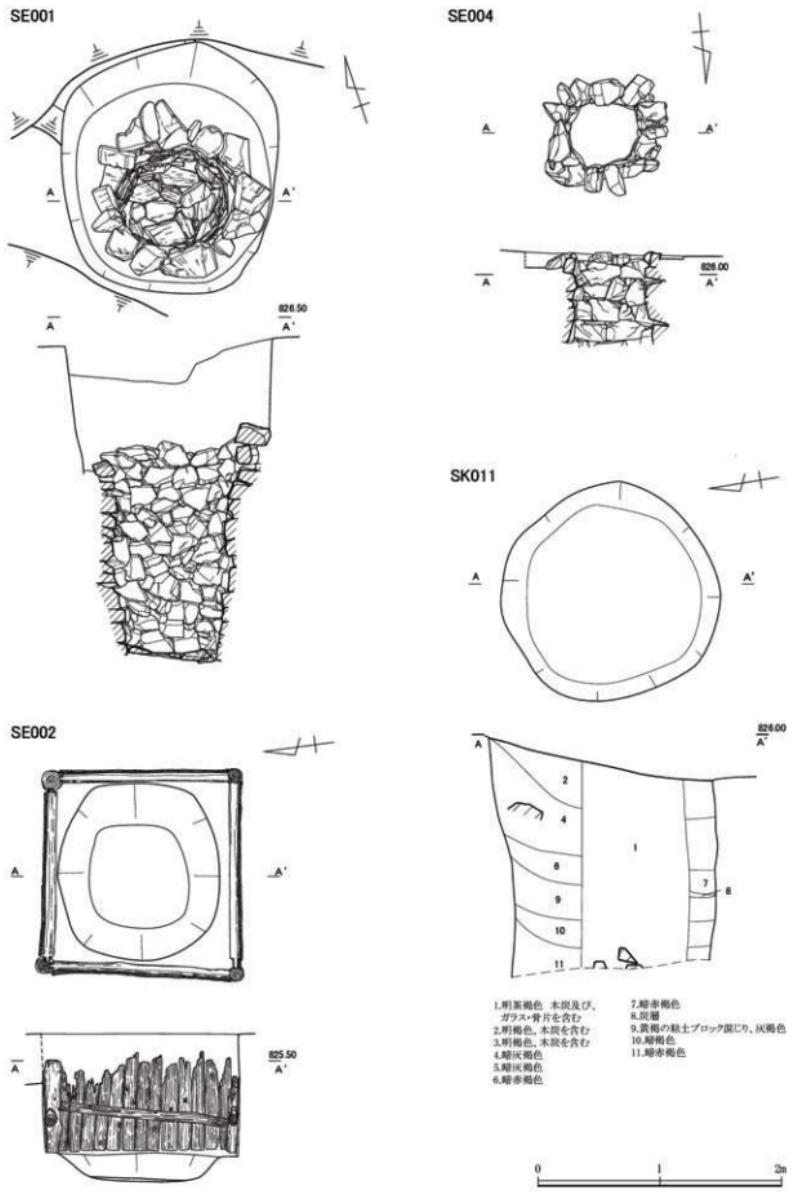
SE003



SE007



第6図 造構図1(縮尺1/40)



第7図 遺構図2 (縮尺1/40)

降下を容易にしているものと考えられる。検出面から1.80m下がった位置の中心で、立て板を組み合わせてタガで留めたと考えられる井戸枠を検出した。井戸枠の直径は0.80mを測る。井戸枠の腐朽が著しく、特に井戸枠の上部の残存が少ない。井戸枠は、深さ2.4m以上を測る。

埋土からは陶器が出土した。遺物の特徴から19世紀以降に埋没したと考えられる。

b. 特殊遺構

S X 0 0 1 (第9図・図版8)

B区で検出した木枠を収めた土坑である。掘り方の規模は2.20m×2.1m以上の平面隅丸方形で、深さは検出面から約0.6mを測る。遺構の南側は攪乱によって壊されている。土坑の底面から約0.2m盛上し、木枠を設置している。

木枠は0.90m×1.20mを測り、残存していた高さは0.52mを測る。木枠は2枚の板材を並べて底にしている。側板を立てて小口部分にホゾを設けて横板を差し込んでいる。板はすべて鉄製の釘で留められている。また、床板には径約0.4mの穿孔があり、短い棒材で栓がなされており、水抜きが可能となっている。

埋土からは磁器や土師器皿、錢貨が出土した。遺物の特徴から遺構の埋没は江戸時代後期と考えられる。

S X 0 0 3 (第9図・図版9)

B区で検出した折敷理納遺構である。掘り方の規模は不明確で、東西方向に連なる落ち込みの中で検出した。2.20m×2.1m以上の平面隅丸方形で、深さは検出面から約0.3mを測る。

収められていた折敷は34cm四方で、四隅を切り欠いている。北側の側板は外れており、立縁の高さは5cmを測る。

折敷の中から5枚の青磁皿が出土した。このような遺構は、「屋敷地取作法」による地鎮と考えられる。折敷からは青磁皿の他に、「南方ニ 倍故十方空」と墨書きされた木簡が出土したため、建物を取り囲む四隅の結界のうち、南側の地鎮と考えられる。

遺物の特徴から遺構の埋没は江戸時代後期と考えられる。

S X 0 0 4 (第9図・図版8)

B区で検出した木枠を収めた土坑である。掘り方の規模は一辺1.10mを測る。深さは検出面から約0.4mを測る。

木枠は0.70m×0.80mを測る平行四辺形である。側板には半截材を使用して2段積みにしている。その際、半截材の平滑面を内側に揃えている。残存していた高さは0.30mを測る。底板は確認できていない。この遺構の機能は不明である。

埋土からは遺物の出土はなかった。遺構の埋没時期は不明である。

S X 0 0 5 (第8図・図版9)

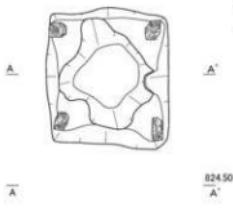
B区で検出した水溜めである。掘り方の規模は1.00m四方の平面隅丸方形で、検出面から深さ約0.9mまで掘り下げている。四隅に角柱状の立木を立てかけている。掘り下げた位置からさらに深さ約0.3mの土坑が掘りくぼめられている。

埋土から土師器皿や陶器が出土した。遺物の特徴から18世紀後半以降に埋没したと考えられる。

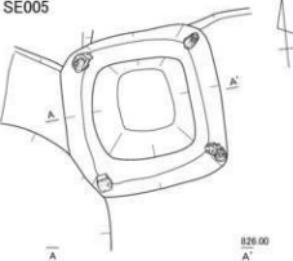
S X 0 0 6 (第9図・図版10)

C区で検出した木枠を収めた土坑である。掘り方の規模は長辺2.50mを測る。深さは検出面か

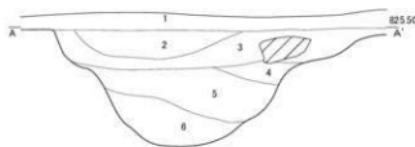
SX005



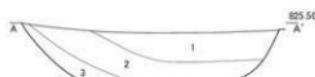
SE005



SK005



SK025



- 1.明赤褐色…電線コード埋土
- 2.明灰褐色。縞を多く含む。木炭片を含む
- 3.明灰褐色。縞を多く含む。木炭片を含む
- 4.明灰赤褐色。木炭片を含む
- 5.暗褐色。木炭片を含む
- 6.暗褐色。(ブロック状に他の土を含む)。木炭片を含む

- 1.明褐色。木炭片を含む。ブロック状に他の土を含む
- 2.暗褐色。木炭片を含む。ブロック状に他の土を含む
- 3.暗褐色。木炭片を含む。ブロック状に他の土を含む

SK008



SK219

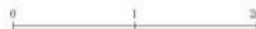


- 1.明褐色。堆山の縞を多く含む。炭を含む
- 2.明灰褐色。粘質まで堆山縞を含む。炭を含む
- 3.暗赤褐色。縞を少し含む。炭を含む
- 4.灰褐色。ブロック状に他の土を含む。炭を含む
- 5.暗褐色。縞を少し含む。炭を含む
- 6.明褐色

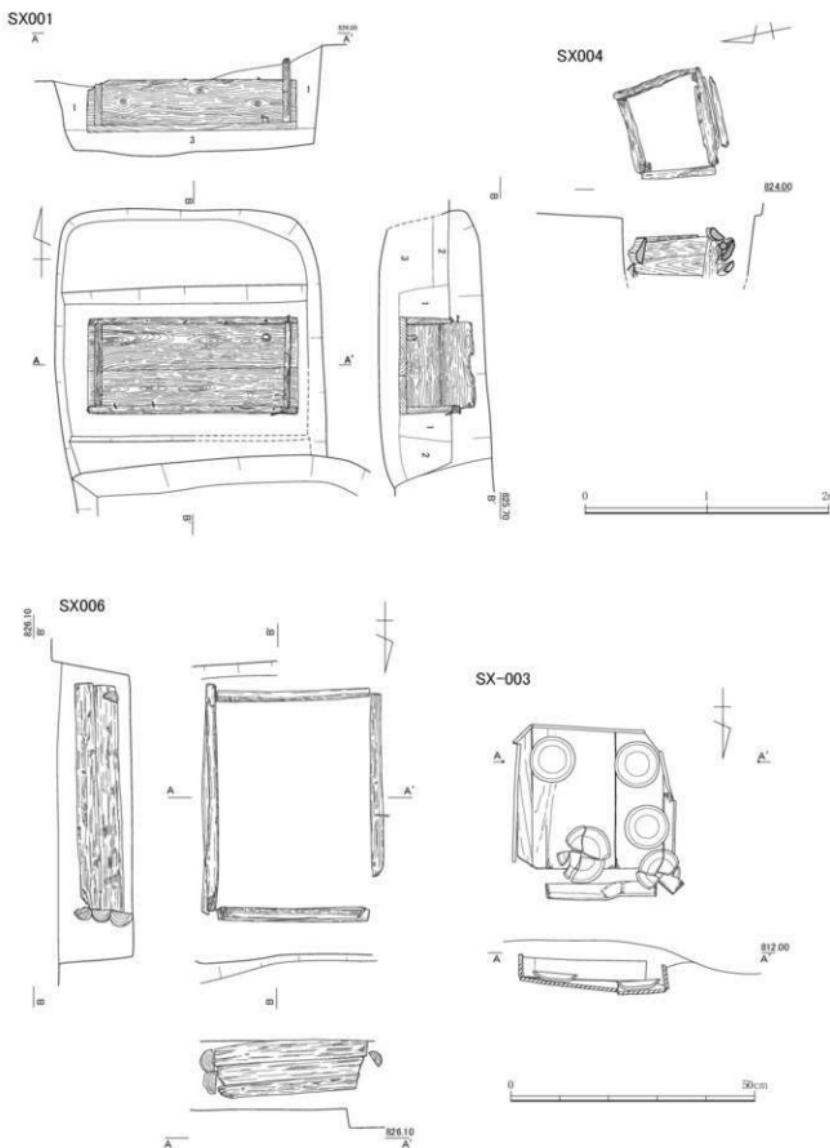


SK024

- 1.明褐色。縞不含む。小縞・木炭片を含む
- 2.明灰褐色。木片を含む。小縞・木炭片を含む
- 3.黄褐色粘質土。小縞・木炭片を含む



第8図 遺構図3 (縮尺1/40)



第9図 遺構図4(縮尺1/40、SX003は縮尺1/10)

ら約0.6mを測る。北西側は他の遺構によって壊されている。

木枠は1.50m×1.86mを測る長方形で、側板には丸太の半截材を使用して3段積みにしている。その際、半截材の平滑面を内側に揃えている。残存していた高さは0.36mを測る。底板は確認されていない。この遺構の機能は不明である。

埋土からは遺物の出土はなかった。遺構の埋没時期は不明である。

S X O 1 0 (第10図・図版10)

E区で検出した五輪塔などの集積である。一石五輪塔や火輪などの五輪塔の残欠が18点集められていた。S X 1 0 は、S D O 6 の北西に位置する浅い窪みで検出し、周間に1.5mを超す横木で区画されているように考えられる。

遺物は中世と考えられるが、後後に集積されたものと考えられたため時期は不明である。

埋め桶O 0 4 (第11図・図版10)

B区で検出した組物の桶である。掘り方は1.90mを測り、深さは約0.8mである。桶を設置するために暗灰色粘土で床をつくり、そこに桶を置いている。

桶の床は板材を組み合わせたもので、直径1.56mを測る。側板も板材を巡らせ、底部付近にタガが残る。便所遺構と考えられる。

遺物は出土しなかった。時期は不明であるが近代以降と考えられる。

c. 淹

S D O 0 6 · S D O 0 9 (第10図・図版11)

E区で検出した石組の水路である。水路の幅は0.20mを測り、約9m検出した。調査区北側から南下する水路は途中でL字に屈曲して東側に流れ、近・現代の搅乱によって壊されている。延長上にあるS D O 2 が一連と考えられるが、S D O 2 は木樋になっている。

水路は深さ約0.5m掘削した後に石を敷いて水路の底にし、側壁は割石を3~4段積み上げている。実際の水路の深さは0.34mを測る。底石の残存する部分は約1.5mである。また、水路西側にも割石が約1.0mに渡って検出できた(S D O 0 6)。東側の石は積み上げられていることがら溝の機能とS D O 0 2 水路の裏込めを兼ねたと考えられる。

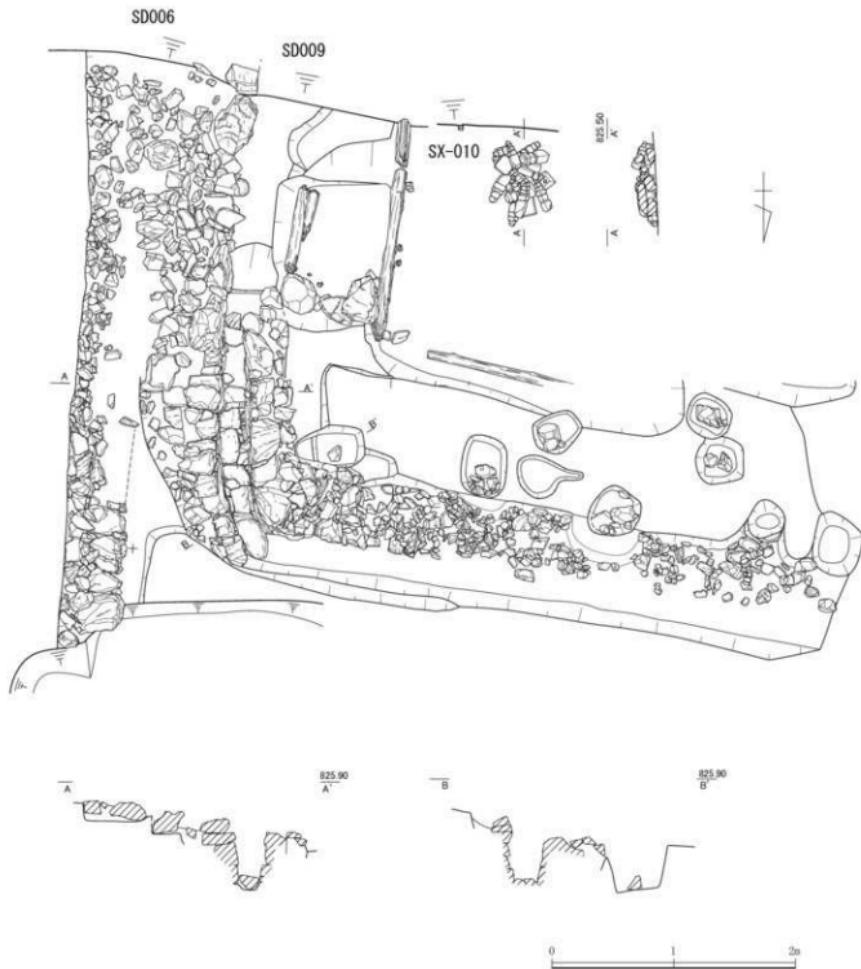
埋土からは磁器や陶器が出土した。遺物の特徴から遺構の埋没は19世紀前半と考えられる。

S D O 0 2 (第11図・図版12)

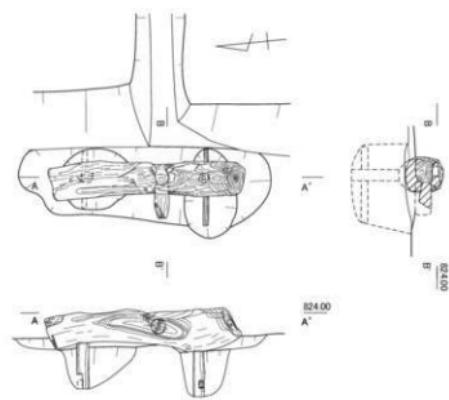
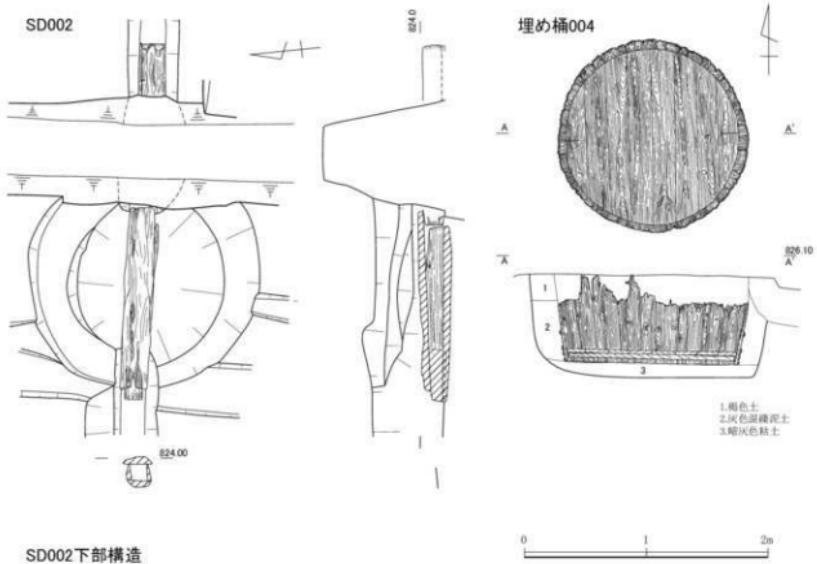
E区・G区で検出した石組の水路である。水路の幅は0.20mを測り、深さは約0.3mを測る。幅0.20m、高さ0.25mの木樋を検出した。木樋が残存していたのは約1.5mで、西側は近・現代の搅乱によって壊されており、延長上にあるS D O 0 9 と一連と考えられる。木樋が残存している部分では、直径0.90mを測るS E O 0 9 と重複しているが、木樋がS E O 0 9 をまたいでいるため、S D O 0 2 がS E O 0 9 よりも新しいと考えられる。

また、S D O 0 2 の西側で南北方向に設置された横木を検出した。横木は、0.05m掘りくぼめられた土坑にさらに約0.4mの土坑を2箇所掘削したところに立てられた板材の上に乗せられていた。横木が沈まないようにするための束柱のような役目をもたせているようである。この横木の上に本来は木樋が乗っていたのかかもしれないが、近・現代の搅乱に壊されているため不明である。

埋土からは遺物が出土しなかった。時期は不明であるが、S D O 0 9 と同一であれば19世紀



第10図 遺構図5(縮尺1/40)



第11図 遺構図6(縮尺1/40)

前半と考えられる。

d. 土坑

SK005 (第8図)

土坑である。長径2.50mを測り、深さ約0.9mである。疊を多く含む埋土で埋没していた。

埋土からは磁器や火輪、石臼などが出土した。遺物の特徴から遺構の埋没時期は18世紀後半である。

SK008 (第8図)

土坑である。長径2.60mを測り、深さ約0.6mである。疊を多く含む埋土で埋没していた。

埋土からは磁器や陶器が出土した。遺物の特徴から遺構の埋没時期は19世紀前半である。

SK011 (第7図・図版13)

A区で検出した土坑である。長径1.80mを測り、深さは1.1m以上である。土坑の中心に0.80mの幅で直線的な堆積が見られる。堆積状況から井戸と考えられる。

埋土からは磁器や陶器が多量に出土した。遺物の特徴から遺構の埋没時期は18世紀後半である。

SK024 (第8図)

土坑である。長径1.50mを測り、深さ約0.3mである。疊を多く含む埋土で埋没していた。

埋土からは磁器や陶器、金属器が出土した。遺物の特徴から遺構の埋没時期は19世紀前半と考えられる。

SK025 (第8図)

土坑である。長径2.12mを測り、深さ約0.4mである。疊を多く含む埋土で埋没していた。

埋土からは磁器や陶器が出土した。遺物の特徴から遺構の埋没時期は19世紀前半と考えられる。

SK219 (第8図・図版13)

F区で検出した土坑である。規模は1.09m×0.7m以上の平面梢円形で、深さは約0.4mを測る。遺構の南側は擾乱によって壊されている。土坑の底面に約0.6m四方を囲うように板石を立てて並べ、床面にも板石を敷いている。

埋土からは一石五輪塔や五輪塔の残欠が出土した。遺物は後世の混じり込みと考えられ、遺構の埋没は江戸時代と考えられる。

(2) 遺物

今回の調査で出土した遺物は、時代を大きく分けると近世と中世の遺物が出土した。近世の遺物は、日常雑器類を中心として出土し、その他に地鎮関係の特殊遺物を確認した。中世の遺物は輸入陶磁器や石塔を確認した。中世の遺物は、全て周辺からの流れ込みによって近代の遺構埋土に混ざったものと判断できる。なお、近世の遺物には二次的な熱を受けて変形もしくは焼けただれたものが多く、火災によって生じた「ゴミ」を廃棄したものが多いと考えられる。

なお、S X 0 0 9 以下は出土した遺構が特定できなかったが、中世の輸入陶磁器などを抽出した。参考資料として提示する。

S E O O 2 (第12図、図版14・16・20・21)

1・2は肥前産磁器である。1は瓶である。口縁部のみで体部は欠損している。外面には蜻唐草を描く。2は青磁の香炉である。口縁端部を内側に拡張させている。3～6は土師器の灯明皿である。全体に橙色の釉薬を施している。3は内面に突起をつくり、灯心をかけやすくしている。7は陶器の灯明皿である。内面に突起をつくりっている。8は陶器の皿である。内面に菊の浮文を貼りつけている。

9は煙管である。煙口の先端と羅字が朽ちて欠損している。142は寛永通宝などである。銭貨が連なった状態で固着したもので、40枚程連なったものである。繊維のまま埋没したのであろう。

1～9の年代は、18世紀前半と考えられる。

S E O O 3 (第12・16図、図版16・22)

10～13は肥前産磁器である。10・11は丸碗である。外面に草花文を描く。高台外面に「大明年製」とある。18世紀後半から19世紀前半と考えられる。12・13は平碗である。黄褐色の釉薬を施している。

150は砥石である。もともとは石塔の台座で、三分の一程度に割れた残欠を砥石に転用している。全体に使用痕があり、中砥程度の用途で使われたものであろう。

10～13の年代は、18世紀後半から19世紀前半と考えられる。

152～156は五輪塔の残欠である。152～154は火輪で、156は地輪である。全て和泉砂岩製である。年代は中世である。

S E O O 7 (第12図、図版14・16)

14・15は陶器である。14は甕で、口縁端部が垂れ下がる。15は花瓶か。底面は糸切り痕があり、上方へすぼまる。14・15の年代は19世紀と考えられる。

S X O O 1 (第12図、図版17・20)

16・17は肥前産磁器である。16は筒型碗である。外面に蜻唐草文、口縁内面に袈裟襷紋を描く。17は丸碗である。外面に草花文を描く。18～19は陶器である。18は小壺である。外面に突起を貼り付けている。19は灯明皿である。20は土師器皿である。非ロクロ整形で、底部不調製である。

141は寛永通宝である。裏面に「文」の文字がある。

16～20の年代は18世紀前半と考えられる。

S X O O 3 (第12図、図版14・21)

21～25は国産磁器である。青磁の皿で、口縁端部が外反する。皿の径は9 cm前後で、釉は全面に施される。5枚セットで同じ作りである。

26は木簡である。表面に「南方（梵字タラーク^モ）悟故十方空」と墨書がある。

21～25の年代は、18世紀ごろと考えられる。

S X O 0 5 (第12図、図版17)

27は肥前産磁器の皿である。底部は幕筒底で、外面に三角紋を描く。28は陶器の急須である。注口部分の破片である。29は土師器の皿である。非クロセラミックで、底部は不規則である。

27～29の年代は、19世紀前半と考えられる。

S X O 1 0 (第17・18図、図版22・24)

157～167は一石五輪塔である。157～159は緑泥片岩製で、160～167は和泉砂岩製である。すべて刻印はない。168～172は五輪塔の残欠で、168は空風輪である。169～172は火輪である。すべて砂岩製である。これらの遺物は、中世と考えられる。

S K O 0 5 (第12・18図、図版14・17・24)

30は肥前産磁器である。いわゆる広東碗で広くて高い高台をもち、外面に格子文を描く。31・32は陶器である。31は蓋で、外面に渦巻状の突起で装飾する。32は壺の耳部分である。

30～32の年代は、19世紀前半と考えられる。

173は石臼である。ホゾ穴の周辺は菱形に削り出している。使用痕を明瞭に残す。174は五輪塔の残欠で、火輪である。中世と考えられる。

S K O 0 8 (第12図、図版17)

33～35は肥前産磁器である。33は丸碗である。34は平碗である。35は筒型碗である。体部に草花紋、内面に四方裂波瓣文を描く。36は陶器の鍋である。口縁端部は短く折り返している。

33～36は、18世紀後半と考えられる。

S K O 1 1 (第13図、図版14・17・18・20・21)

44～52は肥前産磁器である。44～46は端反碗である。内外面に草花紋を描く。47・48は丸碗である。内外面に草花紋を描く。49は大皿である。50は輪花皿である。型押して、内面に草花紋を描く。51・52は瓶である。51は口縁端部が短く外反する。52は底部に短い高台をつける。外面に草花紋を描く。53～61は陶器である。53～59は灯明皿である。口縁端部に煤の痕跡が多く残る。54は内面に突起をつけて灯心を固定しやすくしている。58・59は蓋である。58の内面には「龍光」の墨書がある。60・61は雪平鍋である。口縁端部に持ち手を貼り付けている。62は瓦質の火鉢か。体部に直径2mmの穿孔がある。63・64は焼締陶器の捕鉢で、64は片口状になる。備前産である。

65～67は石製品である。65・66は砥石である。使用痕が多く残る。65は中砥である。66は端部に細かい溝状の凹みが確認できる。端部調整用の仕上砥と考えられる。67は温石か。扁平な川原石で全体に披熱痕が確認できる。

44～64の年代は、18世紀後半と考えられる。

S K O 2 4 (第12図、図版17・20)

37は肥前産磁器である。口縁部が外反する碗である。38は焼締陶器の捕鉢である。備前産か。39は鉄製の鉤である。断面は扁平で、J字形をしている。

37～38の年代は、18世紀代と考えられる。

S K O 2 5 (第12図、図版14・17)

40は肥前産磁器の香炉か。41～42は陶器である。41は蓋である。42は短頸壺である。口縁端部

は平坦に仕上げる。43は雪平鍋である。

40～43の年代は19世紀前半と考えられる。

S D O O 6 (第13図、図版18)

71は磁器の皿である。底部は幕箇底である。72は陶器で天目碗である。黒褐色釉を施す。瀬戸産である。73は焼締陶器の擂鉢である。備前産である。

70～72の年代は17世紀後半から18世紀前半と考えられる。

S D O O 9 (図版19、図版24)

180は一石五輪塔である。緑泥片岩製で、地輪部分に「十月十五日」の銘がある。遺物は中世と考えられる。

S K 1 4 2 (第13図、図版18・24)

70は輸入陶器の壺である。無軸で、口縁端部内面が突出している。南越産と考えられ、16世紀である。

186は一石五輪塔である。緑泥片岩製で、地輪部分に「宗口禪門」「二月十日」と銘がある。175は宝鏡印塔の残欠で、笠部である。これらの遺物は、中世と考えられる。

S K 2 1 7 (図版25)

187は一石五輪塔である。緑泥片岩製で、地輪部分に「淨慶禪門」「口(宝か)徳四年」「九月十日」と銘がある。宝徳四年であれば1452年となり15世紀前半である。188は五輪塔の残欠で、水輪である。和泉砂岩製である。中世と考えられる。

S K 2 1 9 (図版24)

176～178は一石五輪塔である。緑泥片岩製である。182は五輪塔の残欠で空風輪である。砂岩製である。176～179は中世と考えられる。

埋桶O O 3 (第14図、図版18・20)

74は陶器の土鍋である。外面下半は露胎で、内面全体を深緑色の釉薬を施す。外面過半に認識不明の墨書きがあり、底部は煤が付着している。年代は19世紀と考えられる。

143は真鍮製の眼鏡である。直径3.6cm、厚さ0.05cmのガラス製レンズが片方のみ残存している。レンズは円形の縁で挟みこんで留め金部分を針金で巻きつけて固定する仕組みになっている。鼻掛けは「Ω」形をしており、両眼の端には紐掛けが取り付けられている。江戸時代につくられたものか。

S X O O 9 (第14図、図版15)

75は輸入陶器の壺である。外面は無軸、内面は黒色釉を施す。平底で、ゆるやかな肩から口縁がすぼまる。南越産で年代は16世紀末と考えられる。

S K O O 6 (第14図、図版14)

76は磁器の皿である。初期伊万里で、見込みに風景紋を描く。高台に砂目積みの痕跡を残す。年代は17世紀前半から半ばである。

S K O 7 1 (第14図、図版14・15)

77・78は国産陶器である。77は京焼の碗で、見込みに風景紋を描き、高台外面に草書で「清水」と刻む。年代は17世紀半ばと考えられる。78は肥前陶器の呉器手で、灰黄色の釉薬を全面に施す。年代は17世紀半ばから後半と考えられる。

79～81は国産磁器である。79・80は伊万里の碗である。外面に二重圓線に草花紋、見込みに草紋を描く。79と80は同じ紋様で、一組のセットとして使用されていたのであろう。81は仏壇具である。外面に圓線を描く。79～81の年代は17世紀半ばである。

82は輸入陶器の甕である。内外面は無釉である。平底で、ゆるやかな肩に双耳突起がつく。口縁は片口である。南越産で年代は16世紀末と考えられる。

S K O 7 8 (図版20)

83は銭貨である。寛永通宝で、裏面は無紋である。

S K O 8 0 (第14図、図版18・20)

84は輸入磁器の皿である。幕末底で、外面下半には螺旋紋を巡らす。見込みは草花紋を描く。景德鎮産で、年代は16世紀後半である。

144は銭貨である。4枚重なっており、全て寛永通宝で、裏面は無紋である。

S K 1 0 8 (第14図、図版15・18)

85～92は国産磁器である。85～89は伊万里の碗である。85は外面に縱長の雷紋を連続で描き、口縁内面端部に二重圓線を描く。19世紀か。86～89は外面に草花紋を描き、見込みを蛇の目動剥ぎで仕上げる。4脚揃えのセットとして使用されていたのであろう。年代は17世紀後半である。90・91は伊万里の小碗である。90は外面に寿紋を連続で描く。コバルトの発色が目立つ。19世紀である。91は外面に草花紋を描く。17世紀後半である。92は蕪麦猪口である。外面に蛸唐草を描き、口縁内面端部に省略した雷紋帯を巡らす。年代は18世紀前半である。

S K 1 3 0 (第14図、図版18)

93は輸入磁器である。染付(青花)で、外面に草花紋、見込みに十字架紋を描く。16世紀後半である。

94は山茶碗である。高台は平坦で低い。初圧痕が残り、内面は使用によるものが平滑である。東美濃産で、年代は13世紀である。95は灰釉陶器の壺である。底部外面を蛇の目高台風に削り出している。

S K 1 4 8 (第14図、図版15・18)

96は土師器の皿である。底部が押し上げられた、いわゆるへそ皿である。年代は15世紀と考えられる。97は備前の花瓶と考えられる。口縁端部は丸く收めている。年代は16世紀と考えられる。

S K 1 5 0 (第14図、図版18・20)

98は常滑の甕である。口縁がゆるやかに外反する。年代は12世紀である。

145・146は銭貨である。145は5枚が重なっており、確認できる銭貨は唐の「開元通宝」で、反対側は腐食が進み認識不可能である。開元通宝の初鑄年代は621年であるが、中世から近世初頭にかけて広く国内に流通していた貨幣である。146は6枚の銭貨が重なっている。両方とも磨滅が著しく、認識が不可能である。

S K 1 5 8 (第14図、図版16・18)

99は瓦器の碗である。口縁端部内面に窪みがあり、内面は丁寧に磨かれている。大和型で13世紀と考えられる。100は肥前陶器の呉器手である。ややふくらみをもって立ちあがる。年代は17世紀半ばから後半である。

S K 1 7 0 (第15図、図版18・19)

101～108は輸入磁器である。101は白磁の碗である。見込みと豊付に胎土目が残る。1～32は青磁である。102～104は碗である。102は外面に線臨連弁紋を陰刻する。103は碗である。104は内面に二叉片刀による分割線と飛雲紋を描く。105は把手である。3条の陰刻がほどこされる。106は折皿で端部をつまみあげる。107・108は香炉である。104～107は龍泉窯産で、年代は15世紀後半から16世紀前半である。109は大形の折皿で、内面に二重圓線と草花紋を描く。漳州窯産で、年代は17世紀初頭である。

110～113は輸入陶器である。110～113は壺である。110は黒褐色の釉薬が外面に施され口縁内面にまで及ぶ。口縁はコの字に屈曲する。111は無釉で、口縁端部内面が突出している。南越産と考えられ、年代は16世紀である。112は無釉で外面は橙色である。口縁は内湾ぎみに短く立ち上がる。110～112は南越産か。113は無釉の瓶である。器壁が薄い。朝鮮半島産か。110～113の年代は16世紀後半と考えられる。

S K 1 8 6 (図版20)

114は北宋の銭貨である。篆書体の「元豐通宝」で、初鑄年代は1078年である。中世から近世に広く国内で流通していた銭貨である。

S K 1 8 7 (第15図、図版19)

115は滑石製の砥石である。長さ7.8cmの携帯用と考えられ、全面に使用痕が見られる。時代は不明である。

S K 2 1 0 (第15図、図版19)

116・117は輸入磁器の青磁である。116は口縁端部外面に雷紋帶を陰刻している。117は見込みに蓮華紋を陰刻する。116・117は龍泉窯産で15世紀後半から16世紀前半である。

S K 3 3 3 (第15図、図版19)

119は国産陶器の灯明皿である。底部下半以外に黄灰色の釉薬を施す。底部には「龍」もしくは「彦」の墨書、体部下半には「午一二月二一日」と墨書がある。信楽産で、19世紀である。

S D O O B (第15図、図版19)

120は輸入磁器である。漳州窯の皿で、基筒底には胎土目が残る。見込みに草花紋を描く。16世紀後半から17世紀初頭である。

不明遺構 (第15図、図版19)

121・122は瓦質土器である。121はすり鉢である。9条の摺り目を1単位位置きの間隔で口縁端部まで施している。外面には粘土の巻き上げ痕跡が残る。122は機種不明である。外面に突帯を貼り付けている。121・122は16世紀と考えられる。

表土 (整地、近代盛土などの擾乱土を含む) (第15・16・19図、図版16・19・20・21・22・24・25・26・27)

123～129は輸入磁器である。123～125は染付 (青花) の碗である。景德鎮産で16世紀後半である。126は青磁の棱皿である。龍泉窯産で、16世紀か。127は皿である。基筒底である。景德鎮産で16世紀である。128・129は皿である。128はやや青みがかった白色の釉薬を施し、断面角錐形の豊付に砂目が残る。129は内面に草花紋を描く。高台外面に飛びカンナの痕跡を残し、豊付は斜めに切りだされている。128・129は景德鎮窯で、年代は17世紀前半と考えられる。

130・131は国産磁器である。130は伊万里の碗である。見込みは蛇の目剥ぎ取りである。年代

は17世紀初頭である。131は伊万里の皿である。内面に梅紋などを描いている。年代は17世紀半ばと考えられる。132は徳利である。年代は19世紀と考えられる。

133・134は輸入陶器である。133は灰かつぎ天目の碗である。南宋もしくは元で製作されたものであろう。年代は13世紀か。

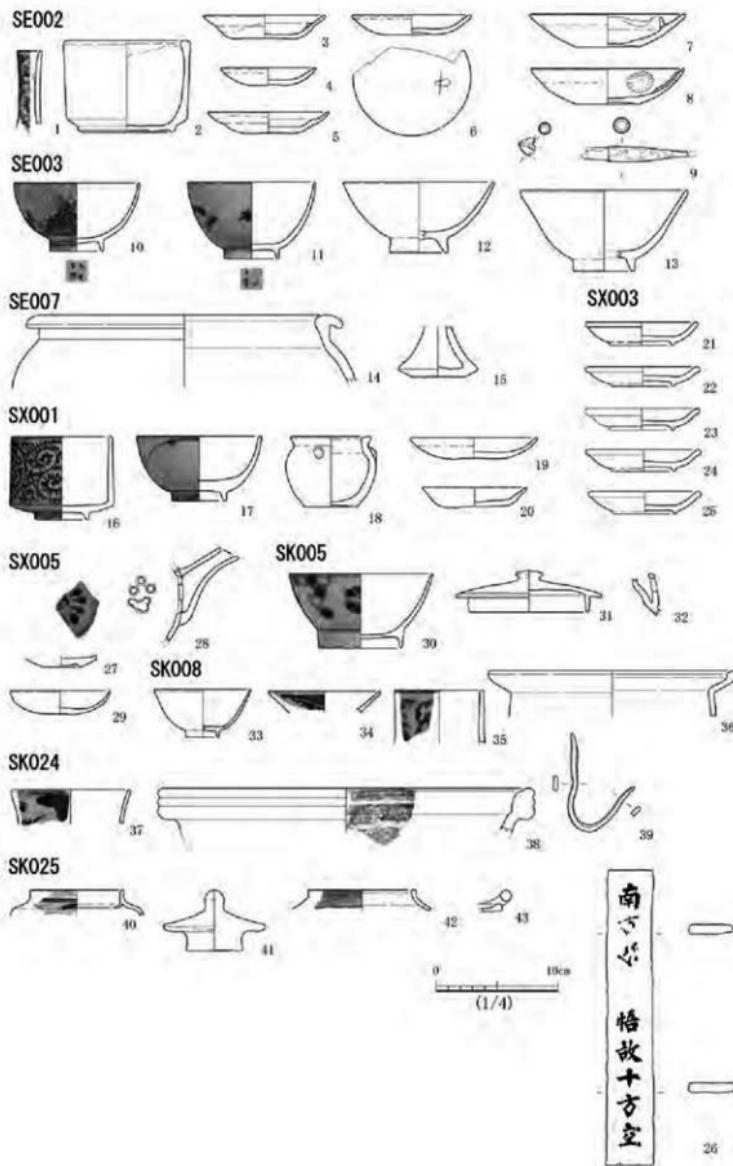
134～138は国産陶器である。134は唐津の碗である。内外面に灰釉を施し、見込みと疊付に胎土目が残る。年代は17世紀初頭である。135は碗である。外面に龍を描く。19世紀である。136は瀬戸の灰釉皿である。年代は16世紀後半である。137は陶器の壺である。底部は蛇の目高台で底部に不鮮明な墨書きがある。灰釉を底部以外に施す。瀬戸産で年代は15世紀か。138は東播のこね鉢である。年代は13世紀である。139は瓶で、通称「通い徳利」とよばれる。褐色釉を施し、「高野山」「和泉伊」と筆書きしている。「和泉伊」は屋号か。明治から大正にかけて使われたものであろう。

140～149は金属製品である。140は煙管である。火皿が欠損しており、羅宇は内部に残存する。銅板を巻き込んで製作されている。年代は江戸時代前半と考えられる。147は青銅製品で、器形は不明である。148は金属製のヘラである。バチ形の先端は裏面が鏝を作り出すように突出している。149はバッヂである。表に塔をモチーフにして下部に「高野山 金剛峯寺」とあり、留め金具のある裏面には「御蓮忌 協賛会員章」とある。記念行事の際に作成されたものであろう。

181～184、189～193は一石五輪塔である。181、182、189～193が緑泥片岩製で、183・184は和泉砂岩製である。この中で記年銘があるのが3点で、182に「十一月廿四日」「明応元年」、191に「三月十五日」「文明十三」、193に「文明十七」とある。明応元年は1492年、文明13年は1481年、文明17年は1485年で、すべて15世紀後半である。

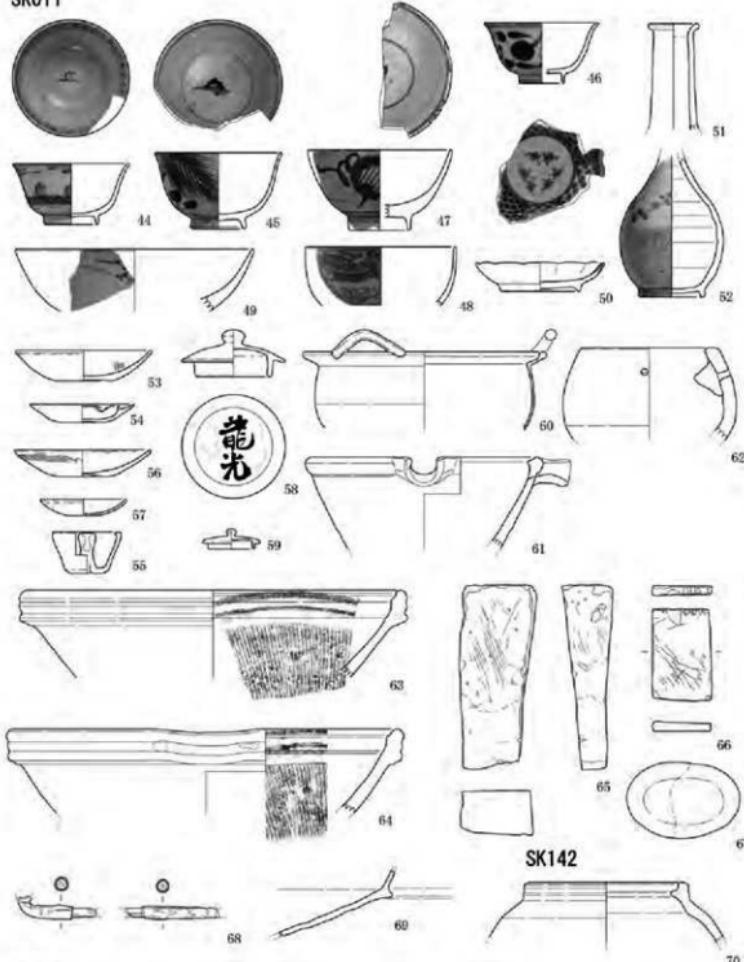
185、194～200は五輪塔の残欠で、185、194、195が空風輪、196が火輪、197・198が水輪、199・200が地輪である。この中で200の地輪に「宗周禪門」「十月八日」「口徳三年」の銘があり、宝徳と読める可能性があるため、1451年と想定できる。これも15世紀後半である。185は風輪の下部が欠損しているので、一石五輪塔になるかもしれない。風輪に蓮紋を連続して陽刻している。197と198の水輪の梵字は朱書きがみられる。これらの石塔は年代が明確なものも含めて15世紀後半であると考えられる。

※1 梵字のタラークは虚空藏菩薩を表している。虚空藏菩薩は厄除けとして利益のある仏である。また、干支守護仏では丑寅（北東）に配される。

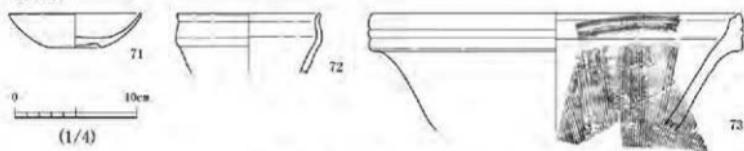


第12図 出土遺物実測図 1

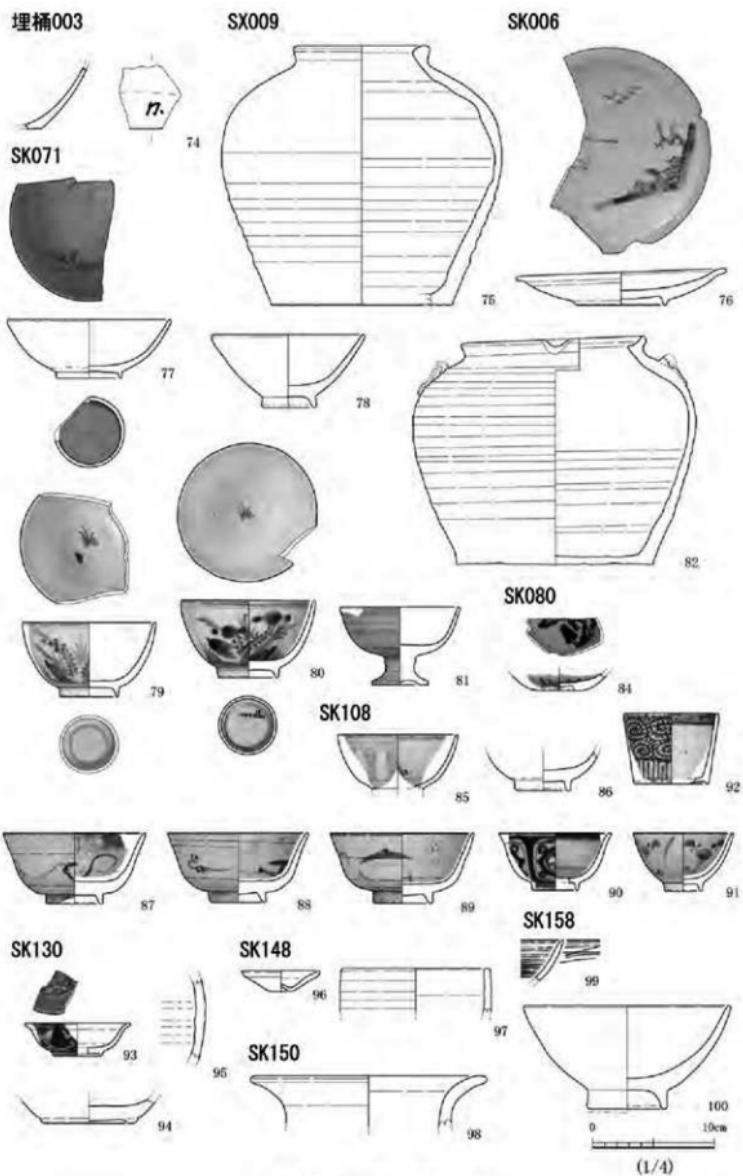
SK011



SD006

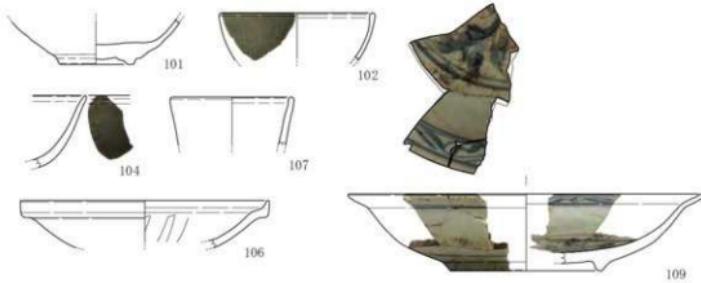


第13図 出土遺物実測図 2

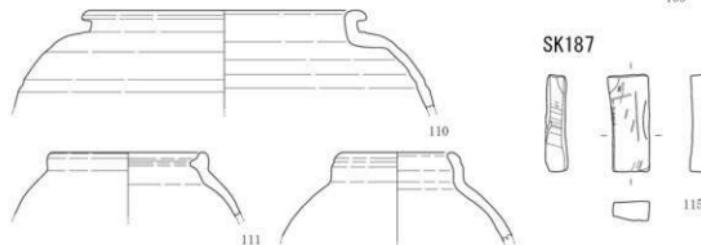


第14図 出土遺物実測図 3

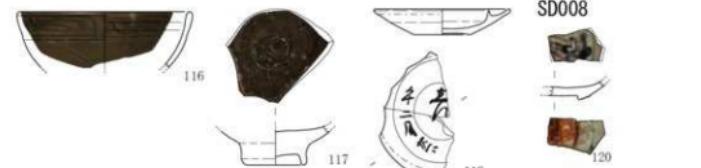
SK170



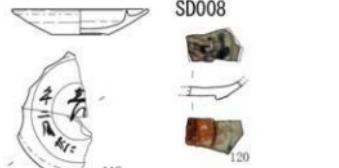
SK187



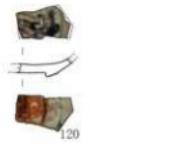
SK210



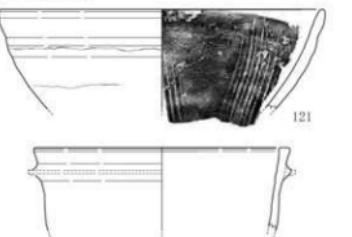
SK333



SD008

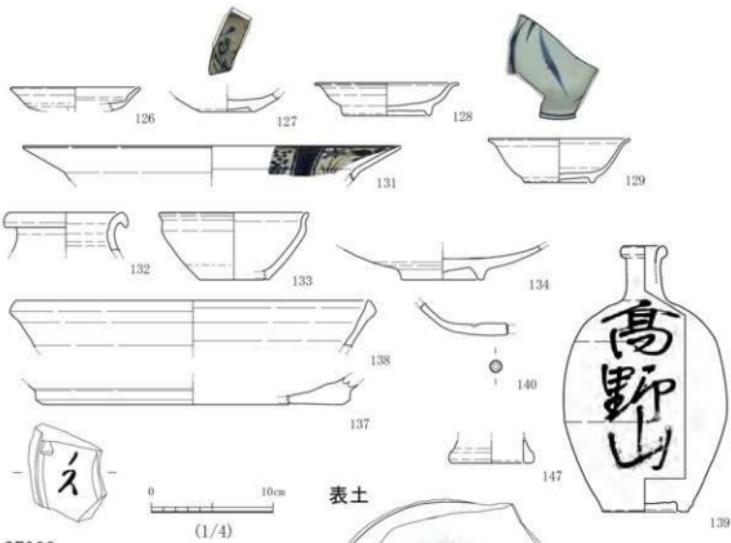


不明遺構

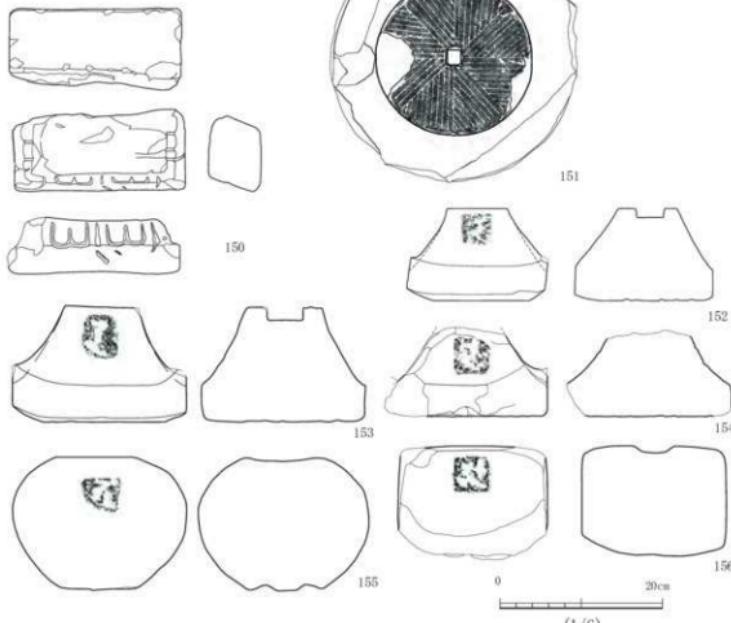


0
10cm
(1/4)

第15図 出土遺物実測図 4

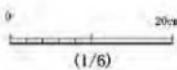
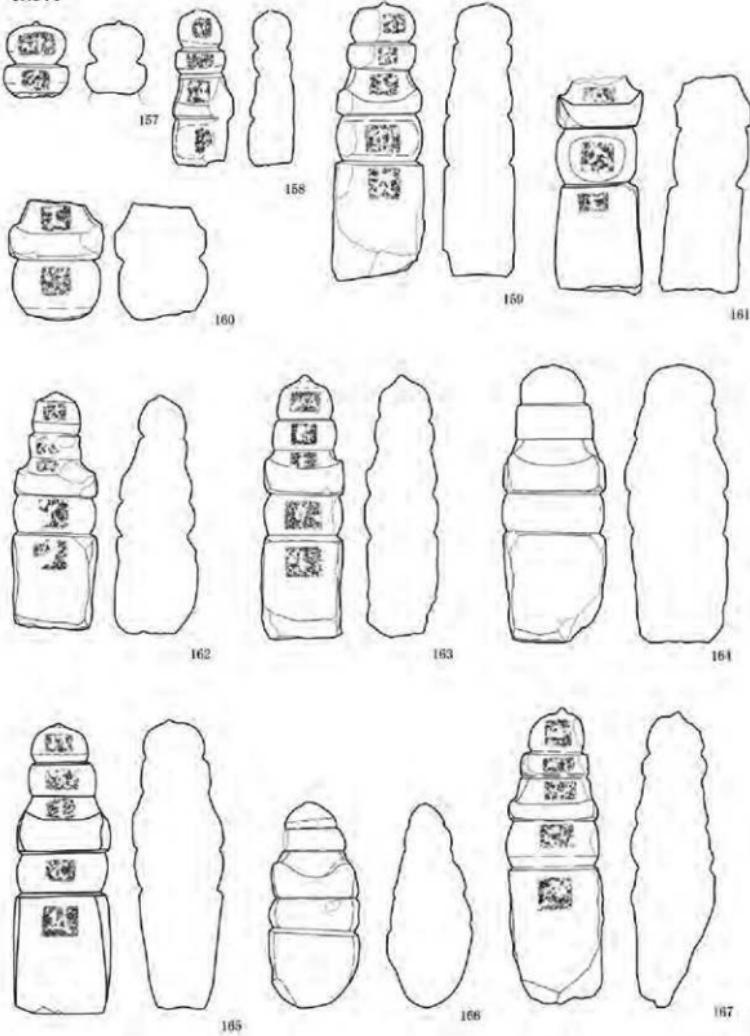


SE003



第16図 出土遺物実測図 5

SX010



第17図 出土遺物実測図 6

SX010



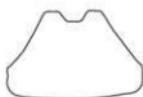
168



169



170

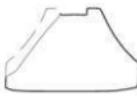


171

SK005



172



173

SK142



174



175

SK219



176



177



178



179



(1/6)

第18図 出土遺物実測図 7

SD009

表土



180



181



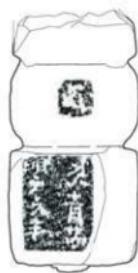
184



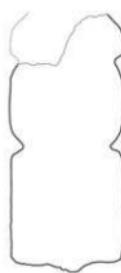
185



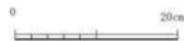
181



182



183



(1/6)

第19図 出土遺物実測図 8

まとめ

昭和59（1984）年から翌昭和60（1985）年にかけて実施された調査は、出土遺物、図面類のすべてにわたって、約30年の間、資料化されることなく、未報告の状態であった。当時の調査内容については詳細な情報を得ることは困難であったが、今回その成果を報告できた。

前述したとおり、調査地は近世期には数ヶ寺が創建されていたことが古絵図等から確認できており、今回の発掘調査において検出した近世に属すると考えられる遺構は、それら寺院に関連するものであると考えることができる。これは、近世期における高野山の隆盛を物語るうえで重要な成果であるといえるだろう。

土層断面図などが欠落したままの整理作業であったが、遺構面は1面であったと考えられ、調査地内において既存建物の基礎コンクリートが残存していることなどを考慮すれば、遺構面より上層は大規模な盛土による造成がなされていると考えられる。それら盛土中からは多量の遺物が出土していることが確認できた。盛土の時期は不明である。

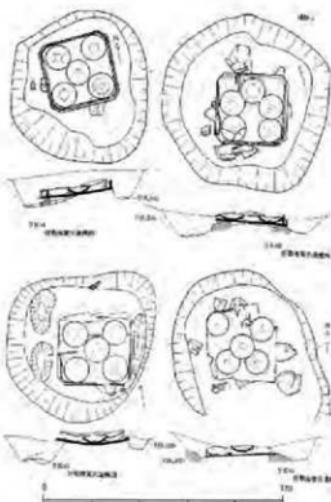
遺構の性格としては、埋土中の遺物情報から近世後期～近代初頭に属するものと考えられ、調査地の歴史性から鑑みれば、近世の寺院群から商家群、大学へと、高野山における近世から近代への変遷を物語っていると考えられる。

また、特筆すべき遺構としては、「屋敷地取作法」遺構を挙げることができる。今回の調査で検出した遺構のなかで、SX003は、

「屋敷地取作法」に則った地鎮遺構であると考えられる。SX003は、掘り廻められたところに折敷を置き、その上に青磁の皿を5枚ならべて埋納している。5枚の青磁皿には五穀を盛り付けていたかもしれない。青磁皿の年代は18世紀代である。

「屋敷地取作法」は建物を建築する際に、建物の周囲に界線を貼るために行なわれる。真言宗の儀式作法である。金剛峯寺遺跡では宝性院跡の発掘調査によって確認されている³⁰。宝性院跡ではこのような埋納土坑を、建物を中心として対角線上に4基配置していた。

今回の調査では1基しか検出できなかったので、調査区外に建物を含めた残りの埋納遺構が存在すると考えられる。また、SX003からは南を示す「南方（梵字タラーク） 僧故十方空」と書かれた木簡が出土していることか



第20図 宝性院跡折敷理納遺構

ら、建物の南側の埋納遺構であろう。宝性院跡で検出された「屋敷地取作法」も江戸時代の遺構と考えられる。

特徴的な遺構としてもうひとつ、S X O 1 0 があげられる。一石五輪塔や五輪塔を意識的に集積した「片づけ」の痕跡と考えられ、一石五輪塔11基、五輪塔6基（空風輪1基、火輪5基）がまとまった状態で出土した。寺院の墓域整理などで行われたものと考えられ、当地域もしくは近隣の寺院に存在した供養塔であろう。五輪塔の時代は記年銘がなく不明であるが、調査地は近世には子院が群立していたと考えられることから、いざれかの子院に所属していた供養塔を商家などへ敷地を移転した際にまとめて整理した可能性が考えられる。

また遺物については大量の遺物が確認されているが、それらの多くは遺構面より上層である盛土内から出土したものである。ここで注目されるのは、18世紀後半～19世紀の胸磁器類に加えて、石造物の出土が多いことにある。双方とも近世期の寺院群に関連する遺物であると考えることが妥当であるが、とくに後者の石造物については、一考の余地があるだろう。というのも、高野山では墓域として認識されるのが弘法大師御廟に続く参道沿いに無数に林立する墓石群の視覚的光景により、奥院が高野山の墓域であるとする考え方が一般的になされるが、古くは奥院以外の西側に存在している多くの寺院群に付属するようなかたちで墓域が存在していたのではないだろうか。現在でも寺院の裏手などには五輪塔に代表される墓石群が残存している寺院も散見されるが、少なくとも近世期においては、それぞれの寺院に墓域が存在し、今回検出された一石・別石五輪塔などが多く建立されていた可能性が指摘できる。しかしこれについては現状では根拠となる情報が不足しているため、本発掘だけでなく、立会調査などの小規模調査などの情報も集積しつつ、今後の課題としたい。

※3 岡本一士「宝性院跡 - 教化研修道場建設に伴う発掘調査 - 」『高野山発掘調査報告書』1982 (財)元興寺文化財研究所

觀 察 表

第1表 遺物観察表1

番号	出土地点	種類	器種	時代	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	色調	断面	胎土	焼成	備考	残存率
1 SE002	磁器	瓶	江戸時代	後半	2.0	-	-	灰白色 オリーブ灰色	5N8/1 2.5N8/1	精良	良好	ヘリ、蛇の目、砂付着	3/4 破片
2 SE002	磁器	香炉	江戸時代	後半	10.4	7.6	8.0	灰白色 5N8/1	5N8/1	精良	良好	ヘリ	1/2
3 SE002	陶器	灯明皿	江戸時代	後半	10.0	2.0	5.0	明赤褐色 2.5YR5/8	2.5YR6/8	精良	良好	回転系切痕、回転ナデ	1/2 (欠損有)
4 SE002	陶器	灯明皿	江戸時代	後半	7.8	1.5	3.1	褐色 5YR5/8	1.5K7/6	精良	良好	回転系切痕、回転ナデ	完形 (欠損有)
5 SE002	陶器	灯明皿	江戸時代	後半	10.0	1.8	4.7	明赤褐色 10R7/6	10YR8/4	精良	良好	回転系切痕、回転ナデ 縁部外側に基底跡あり	完形 (欠損有)
6 SE002	陶器	灯明皿	江戸時代	後半	9.8	1.6	4.0	橙色 5YR6/8	7.5YR7/6	精良	良好	回転系切痕、回転ナデ	1/2 (欠損有)
7 SE002	陶器	皿	江戸時代	後半	12.8	2.7	5.2	灰オリーブ色 7.5YR5/2	2.5Y7/3	精良	良好	回転ナデ	完形 (欠損有)
8 SE002	陶器	皿	江戸時代	19世紀前半	12.6	2.9	5.2	灰オリーブ色 7.5YR5/2	2.5Y8/3	精良	良好	回転ナデ	2/3
9 SE002	金属器	桂管	江戸時代	長さ 最高幅 最太厚	7.6	4.9	0.8	-	-	-	-	-	-
10 SE003	磁器	丸碗	江戸時代	18世紀後半	10.4	6.3	4.4	灰白色 5N8/1	5N8/1	精良	良好	ヘリ 砂付着	2/3
11 SE003	磁器	丸碗	江戸時代	18世紀後半	10.5	6.3	4.5	明赤褐色 7.5G7B/1	5N8/1	精良	良好	ヘリ 砂付着	2/3
12 SE003	磁器	平碗	江戸時代	19世紀前半	12.4	5.8	4.8	黄褐色 10YR8/6	10YR8/4	精良	良好	真入りあり	1/4
13 SE003	磁器	平碗	江戸時代	19世紀前半	13.8	6.7	5.0	灰白色 5N8/2	10YR7/4	精良	良好	真入りあり	1/4
14 SE007	陶器	甕	江戸時代	後半	(25.0)	-	-	椭円褐色 10YR2/3	10YR1/1	精良	良好	ヘリ	1/12 底部充
15 SE007	陶器	花瓶	江戸時代	後半	-	-	4.5	黑褐色 10YR4/1	5N8/1	精良	良好	回転系切痕	3/4
16 SU001	磁器	筒型碗	江戸時代	19世紀前半	9.6	6.9	4.4	透明 5N8/1	5N8/1	精良	良好	砂付着	1/2
17 SU001	磁器	九碗	江戸時代	19世紀前半	10.2	5.3	4.4	灰白色 2.5YR8/2	2.5YR8/3	精良	良好	花形突起を肩部に貼り	1/2
18 SU001	磁器	小壺	江戸時代	後半	6.6	5.8	4.2	灰白色 7.5YR8/1	10YR6/2	精良	良好	付けたる	1/2
19 SU001	陶器	灯明皿	江戸時代	後半	10.4	1.9	-	橙色 5YR8/8	7.5YR7/6	精良	良好	回転系切痕、回転ナデ、油煙	1/2

遺物番号	出土地点	種類	器形	時代	口径 (cm)	品高 (cm)	底径 (cm)	色調	釉	胎土	胎土 焼成	備考	残存率
20 SK001	陶器	灯明里	江戸時代	後半	8.5	1.7	—	褐色	7.5W7/6	精良	良好	回転系切底、回転ナナフ、油墨	1/2
21 SK003	青磁	皿	江戸時代	後半	9.2	1.9	5.2	褐黄色	7.5W7/3	精良	良好	砂付着	完形
22 SK003	青磁	皿	江戸時代	後半	9.4	1.6	5.2	浅黄色	7.5W7/3	精良	良好	砂付着	完形
23 SK003	青磁	皿	江戸時代	後半	9.4	1.8	5.2	浅黄色	7.5W7/3	精良	良好	砂付着	完形
24 SK003	青磁	皿	江戸時代	後半	9.4	1.8	5.2	浅黄色	7.5W7/3	精良	良好	砂付着	完形
25 SK003	青磁	皿	江戸時代	後半	9.2	1.85	5.2	浅黄色	7.5W7/3	精良	良好	砂付着	完形
26 SK003	木製品	木漬	江戸時代	長さ	24.3	4.0	0.8	厚さ	—	—	—	—	—
27 SK005	磁器	皿	江戸時代	後半	—	—	(3.0)	灰白色	7.5W8/1	精良	良好	回転ナナフ、ハリ	破片
28 SK005	陶器	急須	江戸時代	後半	—	—	—	青茶褐色	7.5W3/6	精良	良好	注口のみ	注口のみ
29 SK005	土師器	土鉢	江戸時代	18世紀後半	8.2	2.9	3.0	—	7.5W3/6	精良	良好	—	3/4
30 SK005	磁器	広東碗	江戸時代	19世紀前半	11.8	6.1	6.7	灰白色	7.5W7/1	精良	良好	—	1/3
31 SK005	陶器	蓋	江戸時代	後半	9.7	3.4	12.0	底大径 灰オーブ色	7.5W6/2	精良	良好	回転ナナフ	1/2
32 SK005	陶器	壺	江戸時代	—	—	—	—	灰オーブ色	7.5W7/6	精良	良好	—	破片
33 SK008	磁器	碗	江戸時代	後半	(8.0)	3.9	(2.6)	明暦灰色	7.5W8/1	精良	良好	—	1/4
34 SK008	磁器	皿	江戸時代	後半	(9.2)	—	—	透明	7.5W8/1	精良	良好	口縁部1/3	—
35 SK008	磁器	筒型碗	江戸時代	18世紀後半	(7.3)	—	—	透明	5W8/1	精良	良好	—	—
36 SK008	陶器	鍋	江戸時代	後半	(20.4)	—	—	灰オーブ色	5W6/2	精良	良好	—	—
37 SK024	磁器	碗	江戸時代	後半	9.8	—	—	透明	5W8/1	精良	良好	—	—
38 SK024	焼物陶器	桶鉢	江戸時代	後半	(31.0)	—	—	—	5W6/6	精良	良好	回転ナナフ	破片
39 SK024	金属器	鉗	江戸時代か	長さ	7.6	最大幅 4.9	0.8	—	—	—	—	—	1/5

番号	出土地点	種類	器種	時代	口径 (cm)	深さ (cm)	底径 (cm)	盤	蓋	土	粘土	地成	備考	現存率
40 SK025	磁器	香炉分	江戸時代	後半	(7.7)	—	—	灰白色	578/2	2,578/2	灰白色	精良	良好	回転系切底、回転ナデ、3/4
41 SK025	陶器	蓋	江戸時代	後半	4.6	5.0	8.4	オリーブ色	578/2	2,578/4	灰白色	精良	良好	回転系切底、回転ナデ、3/4
42 SK025	陶器	短颈壺	江戸時代	後半	(8.9)	—	—	オリーブ色	578/2	2,578/4	灰オリーブ色	精良	良好	盤片
43 SK025	陶器	雪平鍋	江戸時代	19世紀前半	—	—	—	オリーブ黄色	578/2	2,578/3	灰白色	精良	良好	盤片
44 SK011	磁器	端反碗	江戸時代	19世紀前半	9.6	5.0	4.2	灰白色	578/2	2,578/4	灰白色	精良	良好	ハリ(欠損有)
45 SK011	磁器	端反碗	江戸時代	19世紀前半	10.4	6.3	4.2	灰白色	578/1	2,578/1	灰白色	精良	良好	砂付着2/3
46 SK011	磁器	端反碗	江戸時代	19世紀前半	(9.8)	5.0	(3.6)	灰白色	578/1	2,578/1	灰白色	精良	良好	砂付着1/2
47 SK011	磁器	碗	江戸時代	18世紀後半	(11.8)	6.6	(4.8)	灰色	578/1	2,578/1	灰白色	精良	良好	砂付着1/3
48 SK011	磁器	丸碗	江戸時代	19世紀前半	(12.4)	—	—	灰白色	578/1	2,578/1	灰白色	精良	良好	盤片
49 SK011	磁器	皿	江戸時代	後半	(19.6)	—	—	灰白色	578/1	2,578/1	灰白色	精良	良好	盤片
50 SK011	磁器	皿	江戸時代	19世紀前半	(10.5)	2.4	6.3	灰白色	578/1	2,578/1	灰白色	精良	良好	砂付着2/3
51 SK011	磁器	瓶	江戸時代	後半	4.2	—	—	灰白色	578/1	2,578/1	灰白色	精良	良好	口部錆の外
52 SK011	磁器	瓶	江戸時代	18世紀後半	—	—	(5.2)	灰白色	578/1	2,578/1	灰白色	精良	良好	砂付着2/3
53 SK011	陶器	灯明皿	江戸時代	18世紀後半	11.2	2.5	4.6	灰白色	578/1	2,578/3	淡黄色	精良	良好	回転系切底、回転ナデ、(欠損有)
54 SK011	陶器	灯明皿	江戸時代	18世紀後半	8.6	1.5	3.5	淡黄色	578/1	2,578/3	淡黄色	精良	良好	回転系切底、回転ナデ、完形
55 SK011	陶器	灯明具分	江戸時代	後半	5.6	3.4	3.6	黑色	578/6	2,578/6	暗色	精良	良好	外面は物の剥離が激しい3/4
56 SK011	陶器	灯明皿	江戸時代	後半	11.2	2.2	3.6	淡黄色	578/4	2,578/2	灰白色	精良	良好	ハリ、油煙3/4
57 SK011	土師器	灯明皿	江戸時代	18世紀後半	7.1	1.4	2.4	無色	578/6	2,578/6	灰白色	精良	良好	油煙4/5
58 SK011	陶器	蓋	江戸時代	後半	6.0	3.9	8.6	淡黄色	578/1	2,578/3	灰白色	精良	良好	回転ナデ(欠損有)
59 SK011	陶器	蓋	江戸時代	18世紀後半	3.8	1.7	4.8	灰オリーブ色	578/1	2,578/3	灰白色	精良	良好	回転ナデ完形

遺物番号	出土地點	種類	器種	時代	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	輪 (cm)	色調	胎土	施成	備考	残存率
60 SK011	陶器	鍋	江戸時代	19世紀前半	(20.0)	—	—	—	オリーブ黄色	灰色	精良	良好	口縁部1/4
61 SK011	陶器	雪平鍋	江戸時代	19世紀前半	19.6	—	—	—	5W6.3	5W6.1	精良	良好	2/3
62 SK011	瓦器	火鉢	江戸時代	後半	(11.3)	—	—	—	オリーブ色	灰色	精良	良好	口縁部1/4
63 SK011	瓦器	湯鉢	江戸時代	18世紀後半	(31.8)	—	—	—	黑色	10W2.1	精良	良好	回転ナデ、ミガキ
64 SK011	焼締陶器	湯鉢	江戸時代	後半	(62.8)	—	—	—	5W3.3	5W5.6	精良	良好	破片
65 SK011	石器	砾石	江戸時代		長さ 15.1	最大幅 6.0	—	—	2.5W6.8	橙色	精良	良好	回転ナデ
66 SK011	石器	砾石	江戸時代		長さ 7.6	最大幅 4.9	最 大 厚 0.8	—	—	—	—	—	口縁部1/4
67 SK011	石器	墨石	江戸時代		長さ 9.3	最大幅 6.2	—	—	—	—	—	—	—
68 SK011	金風呂器	煙管	江戸時代		長さ 7.6	最大幅 4.9	最 大 厚 0.8	—	—	—	—	—	—
69 SK011	金風呂器	鍋	江戸時代か		(50.0)	—	—	—	—	—	—	—	鍋による腐食が著しい
70 SK142	陶器	甕	室町時代	16世紀	(13.5)	—	—	—	オリーブ黒色	黒色	精良	良好	1/12以下
71 SD006	磁器	皿	江戸時代	後半	(10.8)	2.8	(4.2)	5W6.8	灰色	灰色	精良	良好 ハリ	1/4
72 SD006	陶器	天目碗	江戸時代	19世紀前半	(11.8)	—	—	—	黒褐色	灰色	精良	良好	破片
73 SD006	焼締陶器	湯鉢	江戸時代	18世紀後半	(30.8)	—	—	—	5W6.6	5W7.6	精良	良好	—
74 里樋03	陶器	土鍋	江戸時代	19世紀	—	—	—	—	19Wリーブ色	灰オリーブ色	精良	良好	外面に不明墨書き。底部に墨付着。
75 SD009	陶器	壺	室町時代	16世紀	(23.0)	21.3	(15.0)	7.5W3/2	黒色	N.5/	精良	良好	貿易無鉛器。内面に黒色釉を施す。
76 SK006	磁器	皿	江戸時代	17世紀半ば	17.4	3.0	7.5	10W6.8	灰色	白色	精良	良好 初期伊万里。見込みに墨書きを施す。	破片
77 SK71	陶器	碗	江戸時代	18世紀前半	(13.4)	4.8	(5.4)	2.5W7/4	浅黄色	2.5W7/4	精良	良好 常見。見込みに墨書き。底に「清水」刻印。	1/2
78 SK71	陶器	碗	江戸時代	18世紀前半	12.6	6.0	4.5	2.5W8.4	灰白色	2.5W8.2	精良	良好 器手。	1/2
79 SK71	磁器	碗	江戸時代	17世紀半ば	11.0	6.1	4.8	2.5W8.1	灰白色	2.5W8.1	精良	良好 伊万里。裏入子。外面に墨書き。	1/3

番号	出土地点	種類	器種	時代	口径 (cm)	深さ (cm)	径 (cm)	色調	底	断土・施成	備考	現存状
80 SK71	磁器	碗	江戸時代	17世紀半ば	11.1	6.4	5.0	灰白色	灰白色	精良	伊万里 一重圓腹。見込み。 伊万里。口縁に草花紋。	ほぼ完形
81 SK71	磁器	仏飯具	江戸時代	17世紀半ば	(9.8)	6.4	4.6	灰白色	Ns/	精良	伊万里。口縫外側に5条 縫。	1/2
82 SK71	陶器	甕	室町時代	16世紀	23.2	18.8	16.2	灰黄褐色	ナリーブ黑色	精良	貿易無輪陶器。片口好 縫。肩部に二耳あり。	ほぼ完形
83 SK73	金属器	錢貨	江戸時代	16世紀後半	—	—	0.8	—	—	良好	寛永通宝	
84 SK80	磁器	皿	室町時代	16世紀後半	—	—	(2.0)	單色リーブ灰色	單色リーブ灰色	精良	伊万里。外側は縱長の雷 紋を施す。	破片
85 SK108	磁器	碗	江戸時代	19世紀	(9.8)	—	—	灰白色	灰白色	精良	伊万里。外側は縱長の雷 紋を施す。	破片
86 SK108	磁器	碗	江戸時代	17世紀後半	—	—	4.6	灰白色	灰白色	精良	伊万里。見込みは蛇の 目。墨付に砂付蓋。	
87 SK108	磁器	碗	江戸時代	17世紀後半	(11.6)	5.8	(4.7)	灰白色	灰白色	精良	伊万里。外側は草花紋。 見込みは蛇の目。	ほぼ完形
88 SK108	磁器	碗	江戸時代	17世紀後半	11.6	5.7	4.6	灰白色	灰白色	精良	伊万里。外側は草花紋。 見込みは蛇の目。	ほぼ完形
89 SK108	磁器	碗	江戸時代	17世紀後半	11.8	5.8	4.9	灰白色	灰白色	精良	伊万里。外側は草花紋。 見込みは蛇の目。	ほぼ完形
90 SK108	磁器	碗	江戸時代	19世紀	(9.2)	4.7	(3.8)	灰白色	灰白色	精良	伊万里。外側は草花紋。 見込みは蛇の目。	コ 1/6
91 SK108	磁器	碗	江戸時代	17世紀後半	(8.2)	4.8	(3.1)	灰白色	2.5678/1	精良	伊万里。外側は草花紋。	1/2
92 SK108	磁器	萬葉猪口	江戸時代	18世紀前半	(7.8)	5.8	(6.2)	灰白色	Ns/	精良	伊万里。外側は萬葉草 紋。内面は雷紋帯。	1/3
93 SK130	糀付	碗	安土桃山時代	16世紀後半	(8.6)	(2.7)	(4.0)	灰白色	578/1	精良	伊万里。外側は草花紋。	破片
94 SK130	山茶碗	碗	室町時代	13世紀	—	—	(7.8)	—	灰白色	精良	伊万里。内面平滑。	1/4
95 SK130	灰釉陶器	漆か 糠食貯(代)	不詳	—	—	—	2.578/2	1.2578/2	灰白色	精良	ヘモリ。京都系土器	1/2
96 SK148	土師器	皿	室町時代	15世紀	(6.4)	1.7	(1.8)	—	10YR8/2	精良	良好	
97 SK148	陶器	甕	室町時代	16世紀	(12.4)	—	—	褐色	10YR8/1	—	—	
98 SK150	陶器	甕	平安時代	12世紀	(19.4)	—	—	黑色	10RE2/4	精良	良好	1/12
99 SK158	瓦器	碗	鎌倉時代	13世紀	—	—	—	灰黄色	10YR8/1	精良	良好	破片

遺物番号	出土地點	種類	器種	時代	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	色調	胎土	胎土・施成	備考	残存率	
100 SK158	陶器	碗	江戸時代	17世紀半ば～	12.0	6.0	4.6	明黄褐色	淡黃色	精良	良好	2/3	
101 SK170	白磁	碗	室町時代	16世紀前半	—	—	(6.2)	灰白色	灰白色	精良	良好	破片	
102 SK170	青磁	碗	室町時代	16世紀前半 (12.8)	—	—	—	單子リーブ灰釉	單子リーブ灰釉	精良	良好	1/12	
103 SK170	青磁	碗	室町時代	16世紀前半	—	—	—	單子リーブ灰釉	單子リーブ灰釉	精良	良好	龍泉窯。外面に細線の輪廻弁文。	
104 SK170	青磁	碗	室町時代	16世紀前半	—	—	—	オリーブ灰釉	オリーブ灰釉	精良	良好	—	
105 SK170	青磁	把手	室町時代	16世紀前半	—	—	—	オリーブ灰釉	オリーブ灰釉	精良	良好	—	
106 SK170	青磁	皿	室町時代	16世紀前半 (20.4)	—	—	—	オリーブ灰釉	オリーブ灰釉	精良	良好	1/12	
107 SK170	青磁	香炉	室町時代	16世紀前半 (10.2)	—	—	—	緑灰色	綠灰色	精良	良好	能泉窯。口縁内面が玉緑状に膨らむ。	
108 SK170	青磁	香炉	室町時代	16世紀前半	—	—	—	綠灰色	綠灰色	精良	良好	1/12	
109 SK170	磁器	皿	安土桃山時代	17世紀初期	(29.2)	(6.3)	(12.6)	灰白色	灰白色	精良	良好	津州窯。口縁内面に草花紋様。	
110 SK170	陶器	壺	室町時代	16世紀前半 (23.4)	—	—	—	黑色 N.5/	黑色 N.5/	精良	良好	1/12	
111 SK170	陶器	壺	室町時代	16世紀前半 (12.4)	—	—	—	褐色	黑色	精良	良好	1/12	
112 SK170	陶器	壺	室町時代	16世紀前半 (9.0)	—	—	—	暗米甌色	10IR1.7/1	精良	良好	1/6	
113 SK170	陶器	瓶	室町時代	16世紀後半	—	—	—	5VR3.3	褐灰色	精良	良好	貿易無釉陶器。	
114 SK186	金屬器	俵	室町時代	—	長さ 23.1	—	厚さ 0.8	—	—	—	—	元豐通宝	
115 SK187	石製品	砾石	不明	—	8.0	3.4	1.6	—	—	—	—	—	
116 SK210	青磁	碗	室町時代	15世紀	(14.4)	—	—	7.5VS3	灰オリーブ色	灰白色	精良	良好	龍泉窯。口縁外面上に雷文書。
117 SK210	青磁	碗	室町時代	15世紀	—	—	5.3	暗オリーブ色	灰黃色	精良	良好	能泉窯。見込みに進藤紋。	
118 SK210	陶器	壺	室町時代	16世紀	—	—	(15.0)	黄灰色	褐褐色	精良	良好	底部 l/4	
119 SK233	陶器	光明皿	江戸時代	19世紀	(11.2)	2.1	(4.6)	淡黄色	2.5VS3	精良	良好	信楽窯。底部外面上に墨書き。	

番号	出土地点	種類	器種	時代	口径 (cm)	深さ (cm)	底径 (cm)	色調	胎土	施成	備考	残存率
120 SD-8	磁器	皿	宝町時代	16世紀後半	-	-	-	灰白色 2.5G78/1	灰白色 2.5G78/1	精良	良好	破片
121 不明電機	瓦質土器	すり鉢	宝町時代	16世紀	(26.8)	-	-	黒褐色 2.5G73/1	13-51 黄褐色 10YR6/3	精良	良好	1/6
122 不明遺構	瓦質土器	不明	宝町時代	16世紀	(21.0)	-	-	-	灰黑色 5Y6/1	精良	良好	1/12
123 遺構面 直上	磁器	碗	宝町時代	16世紀	(12.2)	-	-	明褐色 7.5G78/1	明褐色 7.5G78/1	精良	良好	1/6
124 直上	遺構面	磁器	碗	宝町時代	16世紀	-	-	灰白色 2.5G78/1	灰白色 2.5G78/1	精良	良好	破片
125 遺構面 直上	磁器	碗	宝町時代	16世紀	-	-	(6.6) NM	明褐色 7.5G78/1	精良	良好	破片	
126 近代	磁器	皿	宝町時代	16世紀	(10.6)	-	-	灰オリーブ色 5Y6/2	灰オリーブ色 5Y6/2	精良	良好	1/6
127 新代	磁器	皿	宝町時代	16世紀	-	-	(4.4) 5G78/1	灰白色 5G78/1	精良	良好	破片	
128 遺構面 直上	磁器	皿	宝町時代	16世紀後半	(11.8)	2.7	7.2	灰白色 2.5G78/1	灰白色 2.5G78/1	精良	良好	1/2以下
129 遺構面 直上	磁器	皿	宝町時代	16世紀前半	(11.6)	3.6	(6.6) 2.5G78/1	灰白色 2.5G78/1	灰白色 2.5G78/1	精良	良好	破片
130 近代	磁器	碗	江戸時代	17世紀前半	-	-	-	灰白色 2.5G78/1	灰白色 2.5G78/1	精良	良好	破片
131 近代	磁器	皿	江戸時代	17世紀後半	(31.0)	-	-	灰白色 2.5G78/1	灰白色 2.5G78/1	精良	良好	1/12
132 近代	磁器	德利	江戸時代	19世紀	(10.2)	-	-	9.0オリーブ灰色 2.5G77/1	9.0オリーブ灰色 2.5G77/1	精良	良好	1/4
133 新代	陶器	碗	鎌倉時代	13世紀	(12.2)	-	-	黒褐色 10YR3/1	黒褐色 10YR3/1	精良	良好	1/6
134 近代	陶器	碗	江戸時代	17世紀初頭	-	-	(6.7) 9.0オリーブ灰色 2.5G77/1	9.0オリーブ灰色 2.5G77/2	精良	良好	底部1/2	
135 新代	陶器	皿	江戸時代	19世紀	-	-	-	9.0オリーブ灰色 2.5G77/2	9.0オリーブ灰色 2.5G78/1	精良	良好	破片
136 近代	陶器	皿	宝町時代	16世紀後半	-	-	-	灰黄色 2.5Y7/1	灰白色 2.5G78/1	精良	良好	1/4
137 新代	陶器	壺	宝町時代	15世紀	-	-	(24.8) 9.0褐色 2.5Y7/2	灰白色 5Y7/2	精良	良好	破片	
138 新代	陶器	こね鉢	鎌倉時代	13世紀	(29.2)	-	-	黒色 7.5Y2/1	灰白色 7.5Y2/1	精良	良好	1/12
139 新代	陶器	德利	近代	-	3.8	21.9	7.0	黒褐色 10Y2/2	黒褐色 10Y2/2	精良	良好	完形

遺物番号	出土地点	種類	器種	持(C)	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	色調	胎土	胎土・施成	備考	残存率
140 敷地上	金屬器	煙管	江戸時代	長さ 7.2	最大幅 1.0	—	—	—	—	—	—	—
141 SK001	錢貨	寛永通宝	江戸時代	長さ 24.3	厚さ 0.8	—	—	—	—	寛永通宝	—	—
142 SE002	錢貨	寛永通宝	江戸時代	長さ 24.3	厚さ 0.8	—	—	—	—	縞模様	—	—
143 墓標03	金屬器	眼鏡	江戸時代	19世紀少	幅 6.5	厚さ 1.4	—	—	—	—	片眼にガラスが残る。	—
144 SK080	金屬器	錢貨	江戸時代	長さ 24.2	—	—	—	—	—	—	寛永通宝4枚	—
145 SK150	金屬器	錢貨	江戸時代	長さ 23.8	—	—	—	—	—	—	開元通宝など4枚	—
146 SK150	金屬器	錢貨	不明	長さ 24.2	—	—	—	—	—	—	銚印前により銘名解読 不能の4枚	—
147 敷地上	金屬器	不明		—	—	(7.0)	—	—	—	—	铁錫か。	1/4
148 敷地上	金屬器	ヘラ	近代	長さ 12.1	幅 1.0	厚さ 1.6	—	—	—	—	—	1/2
149 敷地上	金屬器	バッヂ	近代	長さ 3.5	幅 1.8	厚さ 2.4	—	—	—	記念バッヂ	—	1/1

第2表 遺物観察表2

遺物番号	出土地点	種類	年代	高さ	最大幅	石材	梵字	備考・鉛
				(cm)	(cm)			
150	SE003	砥石		7.0	21.2	緑泥片岩	-	台座の転用
151	表土	石臼		16.0	32.5	-	-	
152	SE003	火輪		11.3	17.4	砂岩	有	
153	SE003	火輪		14.3	21.4	砂岩	有	
154	SE003	火輪		(10.9)	20.1	砂岩	有	
155	SE003	水輪		16.4	21.4	砂岩	有	
156	SE003	地輪		(14.0)	18.4	砂岩	有	
157	SX010	一石五輪塔		(9.3)	8.0	緑泥片岩	有	
158	SX010	一石五輪塔		(19.2)	7.5	緑泥片岩	有	
159	SX010	一石五輪塔		34.2	11.0	緑泥片岩	有	
160	SX010	一石五輪塔		(14.8)	11.6	砂岩	有	
161	SX010	一石五輪塔		(27.0)	10.8	砂岩	有	
162	SX010	一石五輪塔		29.3	10.5	砂岩	有	
163	SX010	一石五輪塔		31.8	10.0	砂岩	有	
164	SX010	一石五輪塔		34.1	12.6	砂岩	有	
165	SX010	一石五輪塔		35.7	12.0	砂岩	有	
166	SX010	一石五輪塔		25.1	11.0	砂岩	無	
167	SX010	一石五輪塔		36.5	11.6	砂岩	有	
168	SX010	空風輪		16.6	10.3	砂岩	有	
169	SX010	火輪		9.7	15.8	砂岩	有	
170	SX010	火輪		10.8	17.8	砂岩	有	
171	SX010	火輪		9.0	15.8	砂岩	有	
172	SX010	火輪		15.2	16.0	砂岩	無	
173	SK005	石臼		12.5	(19.8)	-	-	-
174	SK005	火輪		10.2	17.0	砂岩	有	
175	SK142	宝篋印塔		14.4	18.8	緑泥片岩	無	
176	SK219	一石五輪塔		(36.8)	10.4	緑泥片岩	有	
177	SK219	一石五輪塔		(32.0)	13.6	緑泥片岩	有	
178	SK219	一石五輪塔		(11.4)	8.3	緑泥片岩	有	
179	SK219	空風輪		15.8	10.6	砂岩	有	
180	SD009	一石五輪塔		(16.1)	8.0	緑泥片岩	有	「十月十五日」
181	表土	一石五輪塔		(40.7)	11.0	緑泥片岩	-	
182	表土	一石五輪塔	1492年	(31.7)	14.0	緑泥片岩	有	「十一月廿四日」「明応元年」
183	表土	一石五輪塔		(41.4)	16.5	砂岩	有	
184	表土	一石五輪塔		37.1	11.6	砂岩	有	「口口禪門」
185	表土	空風輪?		(12.7)	9.8	砂岩	不明	風輪に蓮の葉の陽刻がめぐる
186	SK142	一石五輪塔		39.0	12.6	緑泥片岩	有	「宗口禪門」「二月十五日」
187	SK217	一石五輪塔	1452年か	(55.8)	16.8	緑泥片岩	有	「淨慶禪門」「九月十日」「口總四年」宝か
188	SK217	水輪		15.4	19.1	砂岩	有	
189	表土	一石五輪塔		(32.3)	13.0	緑泥片岩	有	「妙淨禪尼」「六月六日」
190	表土	一石五輪塔		30.5	12.0	緑泥片岩	有	「道光禪門」
191	表土	一石五輪塔	1481年	(27.1)	13.3	緑泥片岩	有	「妙道禪門」「三月十五日」「文明十三」
192	表土	一石五輪塔		36.2	10.4	緑泥片岩	有	「口口」「口口十五か」
193	表土	一石五輪塔	1485年	43.8	14.0	緑泥片岩	有	「口口逆修」「文明十七」
194	表土	空風輪		27.6	16.1	砂岩	有	
195	表土	空風輪		19.8	13.0	砂岩	有	
196	表土	火輪		16.2	26.0	砂岩	有	
197	表土	水輪		16.9	20.9	砂岩	未有	
198	表土	水輪		16.8	21.0	緑泥片岩	未有	
199	表土	地輪		12.3	18.4	緑泥片岩	有	「七月口口」
200	表土	地輪	1451年か	13.9	19.7	緑泥片岩	有	「宗周禪門」「十月八日」「口總三年」

写 真 図 版



1 調査区全景（東から）



2 調査区全景（南から）



1 A区全景（西から）



2 B区全景（西から）



1 C区全景（南西から）



2 D区全景（西から）



1 E区全景（南から）



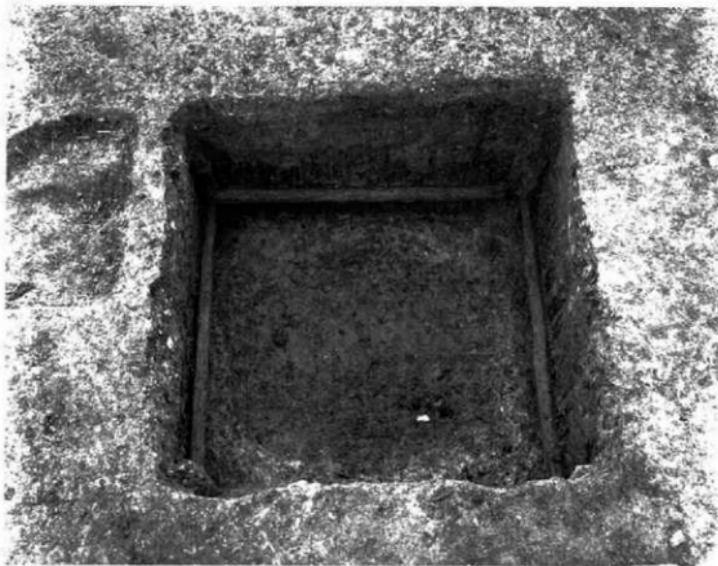
2 F区全景（北から）



1 G・H区全景（南から）



2 SE001（北から）



1 SE 002 (北から)



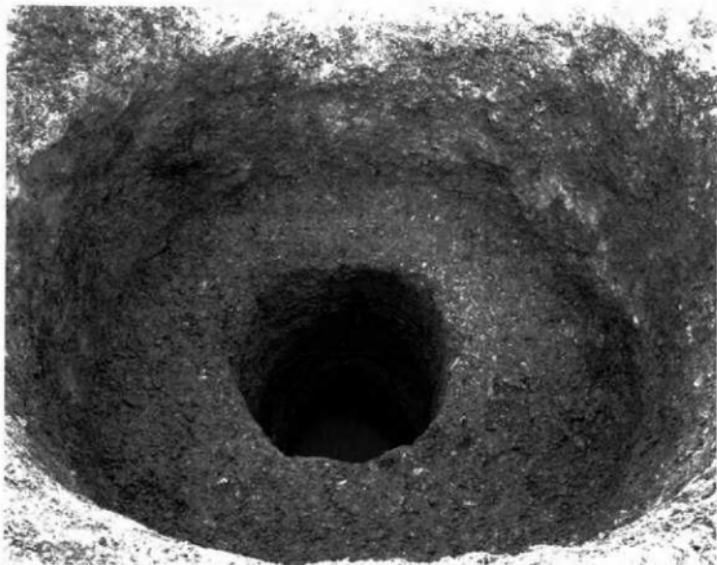
2 SE 003 (北から)



1 SE004 (南から)



2 SE005・SE006 (南から)



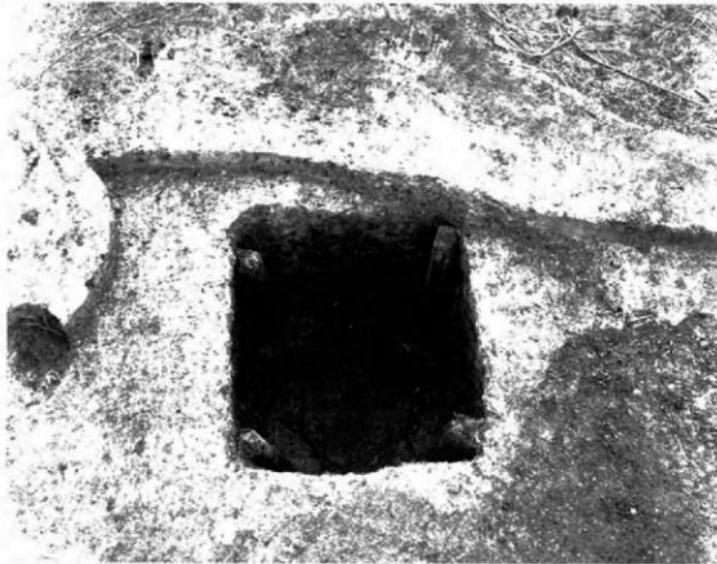
1 SE007 (西から)



2 SX001・SX004 (西から)



1 SX003 (北から)



2 SX005 (北から)



1 SX006・埋桶004（北から）



2 SX010（北から）



1 SD006・SD009・SX010 (南から)



2 SD006・SD009・SX010 (西から)



1 SD002 (西から)



2 SD002下部遺構 (東から)



1 SK011 (北から)



2 SK219 (北から)



SE002 : 4・5・7・8、SE007 : 15、SX003 : 21~25、SK011 : 52~55・58・59・61
SK025 : 41、SK005 : 31、SK006 : 76、SK071 : 77・78



75



82



91



92



78



80



81



87



88

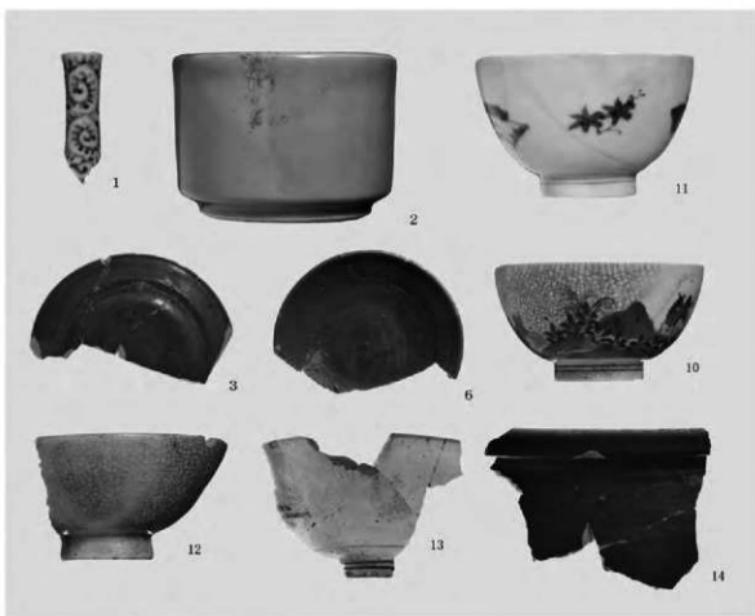


89

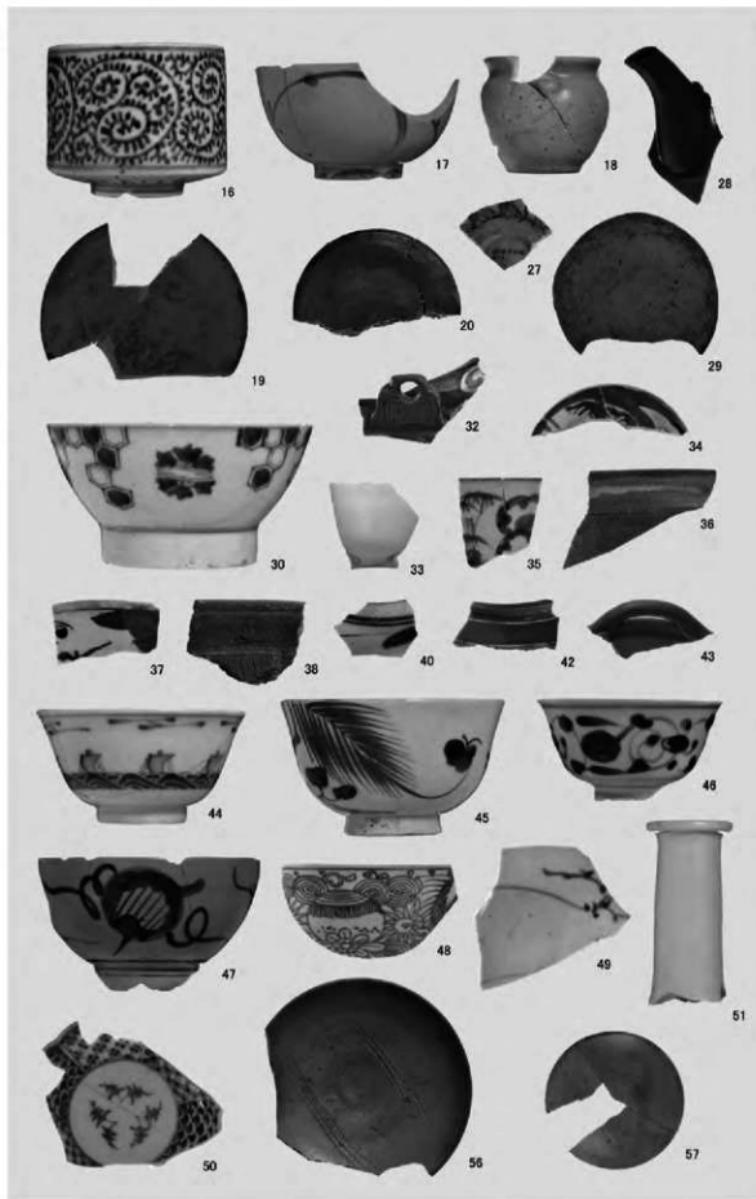


96

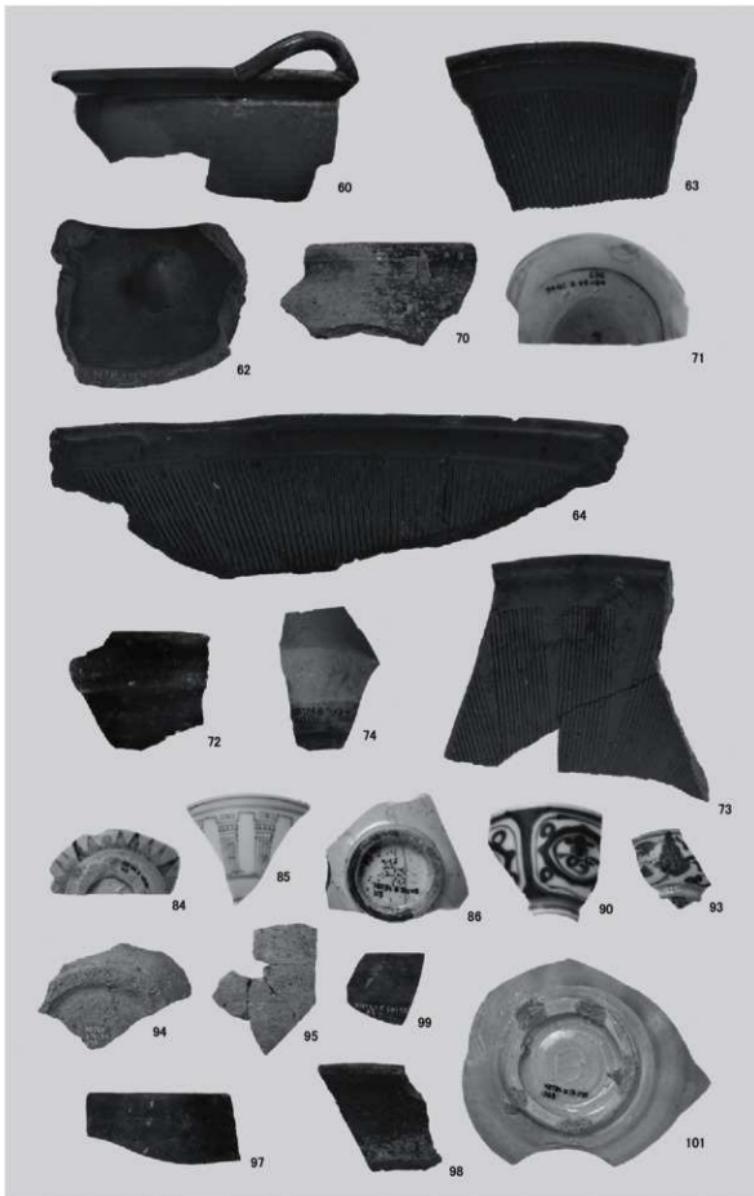
SX009 : 75, SK071 : 79~82, SK108 : 87~89 • 91 • 92, SK148 : 96



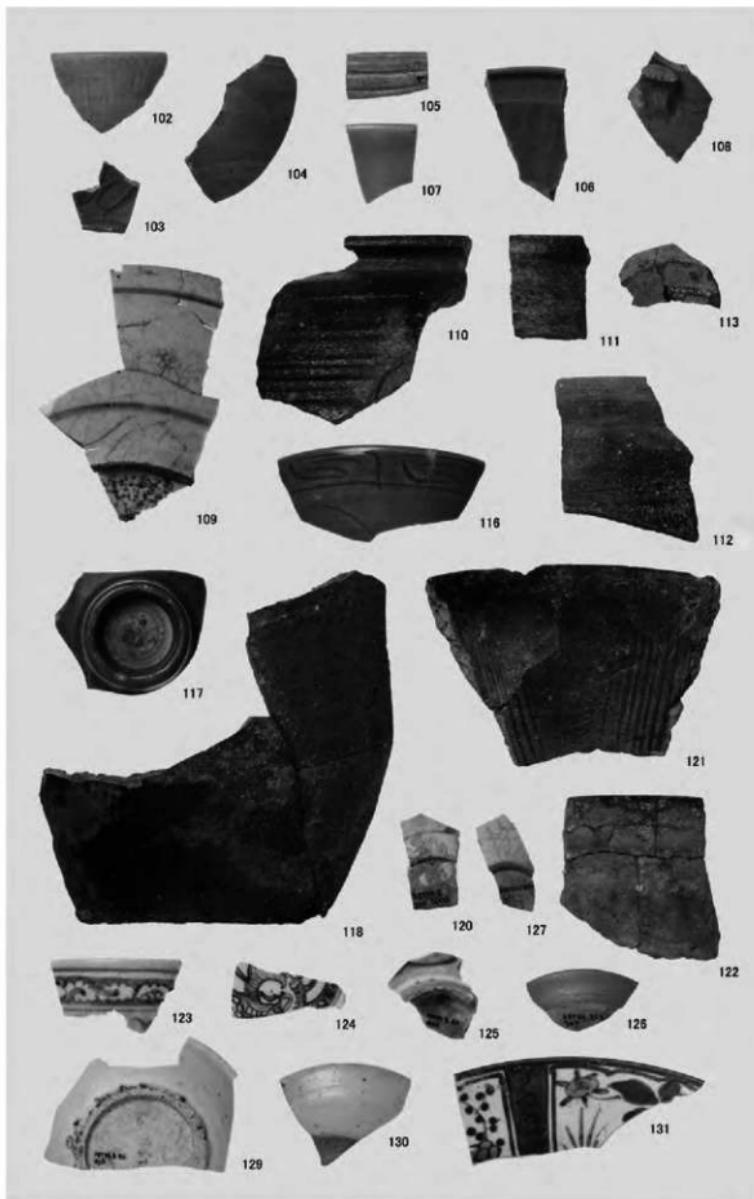
SE002 : 1~3・6、SE003 : 10~13、SE007 : 14



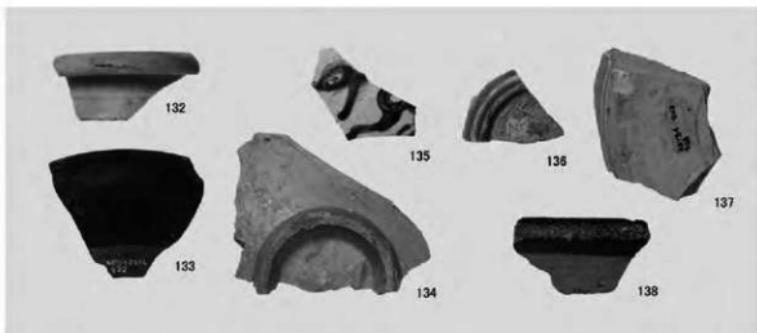
SX001 : 16~20, SX005 : 27~29, SK005 : 30・32, SK008 : 33~36, SK024 : 37・38
SK025 : 40・42~43, SK011 : 44~51・56・57



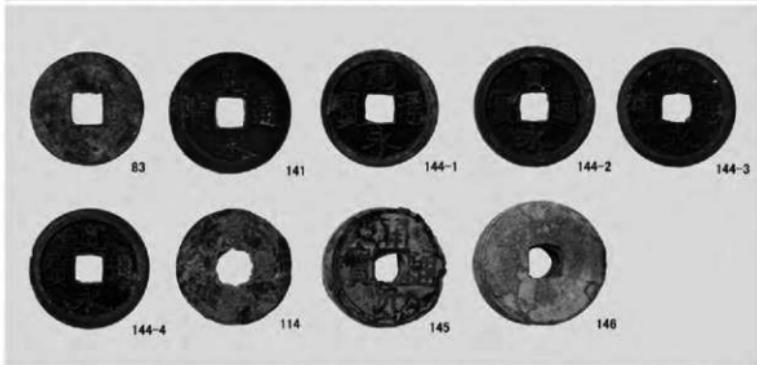
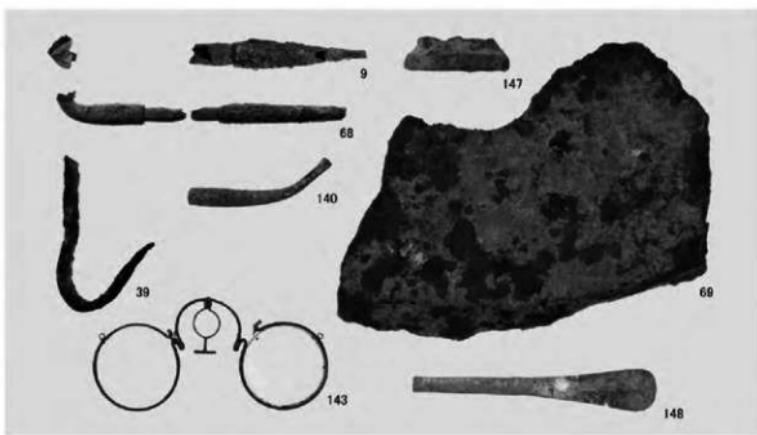
SK011 : 60・62~64、SD006 : 71~73、SK142 : 70、埋桶003 : 74、SK080 : 84、SK108 : 85・86・90
SK130 : 93~95、SK148 : 97、SK150 : 98、SK158 : 99、SK170 : 101



SK170 : 102~113. SK210 : 116~118. SD008 : 120. 不明 : 121・122
遺構面直上 : 123~125・129. 近代整地土 : 126・127・130・131



近代整地土：132～138

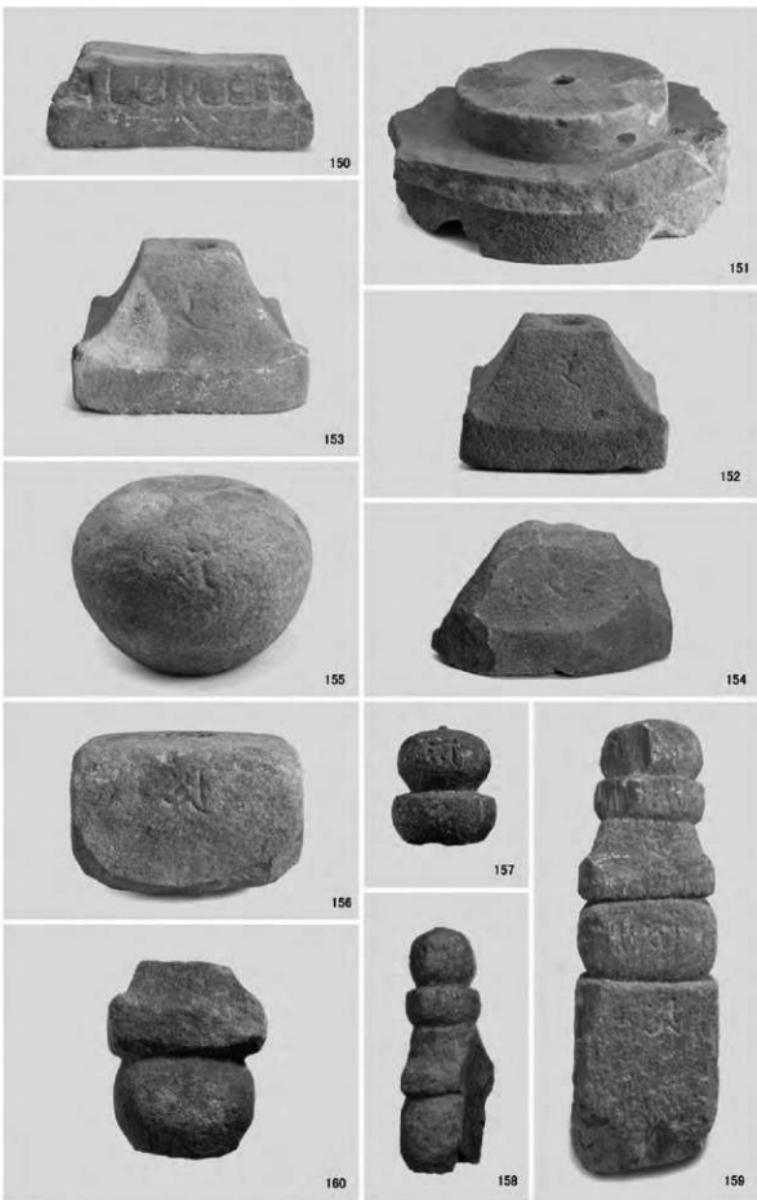
近世整地土：140・147・148、埋桶003：143
SE002：9、SK024：39、SK011：68・69SK078：83、SK080：144、SK150：145・146
SK186：114、SX001：141



142



SE002 : 142、SX003 : 26、SK011 : 65~67、SK187 : 115、近代整地土 : 149



SE003 : 150・152～156、SX010 : 157～160、表土151



161



162



163



164



165



167



166



168



169

SX010 : 161~169



SX010 : 170~172、SK005 : 173・174、SK142 : 175、SK219 : 176~179、SD009 : 180、表土 : 181



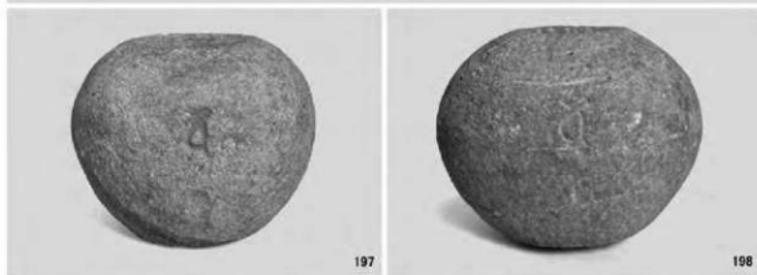
表土：182～185、SK142：186、SK217：187・188



表土：189～195



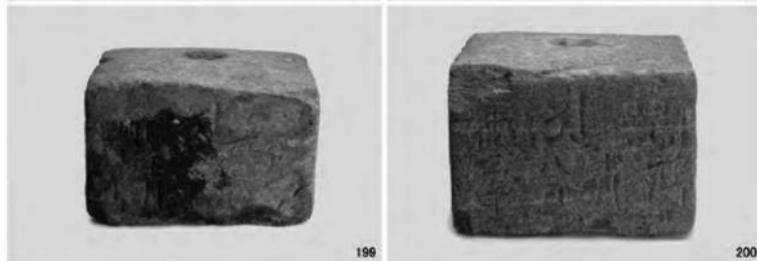
196



197



198



199



200

表土：196～200

報告書抄録

ふりがな	こんごうぶじいせき						
書名	金剛峯寺遺跡						
研究名	高野山大学校舎建設工事に伴う発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	高野町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第4集						
編著者名	池田一城 持田透						
編集機関	高野町教育委員会 株式会社イビソク						
発行年月日	2015年4月1日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經 分	調査期間	調査面積	調査原因
こんごうぶじいせき 金剛峯寺遺跡	わかやまけん 和歌山県 いとぐん 伊都郡 こうやちょう 高野町			34 度 004	135 度 59 分 47 秒	1600 m ²	高野山大学建設
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
金剛峯寺遺跡	社寺關係	近代	井戸 土坑 溝 折敷埋納遺構	陶器・磁器・金柄器・石製品 石塔			江戸時代の「埴敷地取作法」遺構を検出した。 また、大量の五輪塔の残灰や… 石五輪塔が出土した。

平成 27 年 4 月 1 日 発行

金剛峯寺遺跡

-高野山大学校舎建設工事に伴う発掘調査報告書-
(高野町文化財報告書 第4集)

発行 高野町教育委員会
〒648-0281 和歌山県伊都郡高野町高野山486
電話 0736-56-3050

編集 高野町観光協会
株式会社イビゾク
京都府京都市伏見区竹田田中殿町86番地
電話 075-632-8109

印刷 株式会社ウイング
〒640-8411 和歌山県和歌山市堀取17-2
電話 073-453-5700

